
放課後RPG

グコム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後RPG

【Nコード】

N3593Y

【作者名】

グゴム

【あらすじ】

ある放課後、突然、クラス全員が剣と魔法のファンタジー世界に飛ばされた。

天邪鬼な主人公は、この世界に疑問を持ちつつも、完全無欠の生徒会長やイケメン廃人ゲーマーなど濃いクラスメイトと協力しながら、現実世界への帰還を目指す。

1 放課後RPG

それは一瞬だった。

俺、一橋空海はいつも通り幼なじみと一緒に登校し、

退屈な授業を全力で聞き流し、

休み時間に親友と最新ゲームについて意見交換をし、

ホームルームが終わって家に帰ろうと席を立った瞬間、

突然に世界が変化した。

見慣れた教室から何の前触れもなく、何の音もなく、何の抵抗も無く、

教室にいた全員が、周囲を木々に取り囲まれた薄暗い広場にいた。

ポトポトと椅子に座っていた連中が尻餅をつく。

突然の理不尽な仕打ちにうめき声を上げる

そして周りを見渡して声を失っていた。

しばらくの静寂のあと、爆発するようにクラスメイトが騒ぎ始めた。

『何！？、何が起きたの！？』

『ここ何処？』

『どうなってるんだ？』

その大騒ぎが逆に俺の頭を冷やしていった。一回大きく深呼吸をして、周囲を見渡す。

周りは鬱蒼とした森林。俺たちのいる広場には中央にとんでもなくデカイ樹があった。幹の直径は少なくとも数十メートルはある。

広場はこの樹が張るさらにバカでかい根っこによるものだろう。上空を見上げるとその大樹から伸びる枝葉によって空が隠されている。

薄暗い原因はこれのようだ。他には…っと。

相変わらず騒ぎが収まらない中、聞きなれた声が聞こえた。

「おっす。クー」

「タクヤか」

牧原タクヤ（まきはら たくや）。男。出席番号30。イケメン。中身は重度のネットゲーマー。いわゆる廃人だ。小学生の時から付き合いがある。その頃からこいつは当時最先端だった有名MMOにおいてトッププレイヤーだったらしい。今もその世界では有名人との事。俺はコンシューマーゲーム派なのでよく知らないが。分野は違えど重度のゲーマーという共通点を持つこいつとは昔から気が合う。

あとクーは俺のあだ名である。空海だからクー。俺自身はあまり好きでは無い。元凶は幼なじみのバカ。

「クー。この状況どう思う？」

「みんなの事か？まあ王子がすぐに収めるだろ」

「そうじゃなくて、この『世界』についてだよ」

「ああ。どうだろうな。少なくとも日本ではなさそうだな」

「ということは、ついに俺たちは異世界に召還されたんだね!？」

「さあな。もしそうなら試しに魔法でも使ってみるか？」

それはいいとタクヤは言うと、手を突き出しながら、自身のプレイしているゲームの魔法と思われる名前を叫び始めた。まあなにも起きないわけだが。

「クー。タクヤは何してるの?」

「ん。現実逃避だろ」

不安そうな眼をしたポニーテールの女子が声をかけてきた。

更科沙愛^{さらしな さあき}。女。出席番号16。幼なじみ。家が隣同士というテンプレ的状况に加え、幼稚園から現在の高2にいたるまで皆勤賞で同じクラスというもはや呪いと思えない腐れ縁の仲。明るくて容姿も良く、結構もてるらしい。俺にはどこが良いのかわからないが。

いつもはカラカラと明るいやつなのだが、さすがにこの状況ではそんな訳にもいかないようだった。しかし真剣な様子で変なポーズを決めながら叫ぶタクヤをみて、ちよつとは笑っていた。魔法詠唱が無意味に終わり、軽く落ち込みながらタクヤが帰ってくると、さあきがよくわからないけど、どんまいと声をかける。

「ねえ。さつきから変な文字がいっぱい出てくるんだけど、これって二人にも見えてるの?」

「は?どんなのだ?」

「なんか、みんなを見ると出てくるの。名前とか数字とか『LV1』とか」

タクヤと顔を見合わせる。

「それって、ステータスかな?」

「だろうな。おいさあき。それって一人一人に見えるのか?」

「たぶん。いっぱいあるからワケわかんないけど」

「じゃあタクヤを見つめて、書いてあることを全部読んでみてくれ」

「全部?いっぱいあるけど...。えーと『牧原タクヤ・LV1・HP
158・STR7・DEX11・VIT15・AGI10・INT
30・CHR21・スキル/時術1』かな」

確定だな。ステータスだ。どうやらステータスがある世界らしい。

「でもどうゆうことだ。俺たちには見えないぞ」

タクヤが首をかしげる。俺は目をつむり、『ステータス』と念じてみた。すると脳裏に文字が羅列された電子ウィンドウが現れた。

一橋空海

LV1

HP	189
STR	11
DEX	23
VIT	12
AGI	30
INT	8
CHR	16

スキル/死1

「二人とも、眼を閉じて『ステータス』って念じてみ」

「えーと？おお。ステータスだね。さあきが言ったことが書いてある」

「あ。これこれ。私が言っている文字」

「さあき。お前はスキルの所になんて書いてある？」

「んつと。『解析』かな」

「なるほどねえ」

どうやら異世界にきたことが確定したようだ。いやゲームの世界の中？レベルにステータスにスキルがあるんだし。俺のスキルは『死』

でタクヤは『時術』、さあきは『解析』。さあきの『解析』は人のステータスを調べるスキルみたいだな。タクヤの『時術』は呼んで字のごとくだろう。俺の『死』はよくわからんし、ステータスについてはまだよくわからん。

「スキルにレベルか。典型的なRPGだね」

「ああ。ということは、おそらくモンスターもいるだろうな」

「HPもあるしね。やっぱりHPがなくなったら死ぬのかな？」

「どうだろうな。実際HPが無くなる＝死亡ってゲームはそこまですくは無いものだけど。でもまあ試すわけにはいかないが」

「うーん。あ、そういえば、だいぶみんな落ち着いたみたいだね。

さすが王子」

「そうだな。じゃあ王子とも相談するか」

落ち着き始めたクラスメイトの中で、ひときわ大きな集団の中心にいる男子がみなに落ち着くように指示を出している。

王子こと天王寺 淳。男。出席番号20。カリスマ。高1から生徒

会長になってみたり、剣道四段だったり、全国模試も上位キープしてみたり、とやりたい放題な才能。家は貧乏らしいが（弟、妹が合わせて10人近くいるそうだ）その分性格が良い奴すぎているスーパー高校生。

王子に話しかけ、タクヤが今分かっている事を説明する。ここは現実ではないこと。ステータス、スキルの事。その話を周りで聞いていた奴らが信じられない、もしくは理解できないといった表情を浮かべる。その中で王子はすぐに自身のステータス、スキルを確認していた。

「スキル 天賦の才（剣）1、光術 1、とあります」

「さっすが王子。完全に勇者ですね。本当にありがとうございます」
「まったくだ。なんで2個もスキルがあつてしかもそんなに勇者っぽいんだよ…。爆発しろ。」

王子は異世界であることに納得すると、次にこれからの事について聞いてきた。俺たちはとりあえず人のいる集落に行くべきだと主張。王子も同じ考えのようで、最初の問題はどつやって集落を見つけたかだった。俺は上空に広がる大樹を見上げながら言った。

「なあ…異世界召還物つてさ。大体、身体能力が強化されてるよな」
「確かに大体そうだね」

「そうゆう物なのですか？」

俺は、試してみるかつと呟いて後ろにいたさあきを見詰めた。

「おい。さあき。ちょっとその場でジャンプしろ」
「は？」

タクヤは何か気付いたようにニヤニヤし始めた。王子はじつとさあきを見つめている。首をかしげながらも、さあきがフツと軽くジャンプした…。ように見えたが、現実には3メートルほどの大ジャンプになった。予想だにしない大ジャンプにさあきは軽くパニックに陥り、はためくスカートを抑えることさえ忘れて空中で騒いでいる。

「おー跳んだなー」
「白だ！やっぱ白が至高だよね！」
「…これは」

喜ぶタクヤと無言でガン見している王子。俺はさあきのなんか見ても嬉しくもなんともないのだが。降下中に我に返り、スチャッと華麗な着地を決めたさあきに三人ともぶん殴られたのは言うまでもない。

と、言うことで俺たちは広場中心におわす大樹に登って周りを見渡すことにした。ぱっと見、高層ビルくらいの高さがあったが、ごつごつして足場は十分にあっし、ジャンプ力も冗談みたいの有ったので問題無く登ることができ、その結果、森はしばらくするとに草原に開けており、その先に集落のようなものが確認された。

次の問題は移動、そしてこの約40人の身元不明者で街に入れるかということだ。

しかし、夜になってしまうと色々とマズイだろうという事で、俺たちはすぐに移動することにした。

結論から言うと甘かった。モンスターが現れて一人殺された。歩く植物っぽいのが不意打ちを仕掛けてきて、集団から離れ気味だった男子を、みんなが気がつく前に食い殺した。俺たちが気がついたのは、非現実的なそのモンスターがさっきまで人間だった物体の一部分を持って近づいてきた時で、当然クラスは一瞬で恐慌状態に陥ったが、王子とタクヤの統率力と、スキル『天賦の才（格闘）』持ちの奮闘により危機を脱した。

仁保姫紅亜礼にほひめくあ。女。出席番号24。見た目ツインテールのロリっ娘（150cm無い）。あまり接点が無いため詳しい性格などは知らない。さあきによると家が古武術的な物の道場で、普段はかわいらしい妹みたいな性格らしい。

戦闘中の雰囲気には鬼気迫るものがあっしたが、それよりも敵を倒し

た後の、

「こわかった。テヘッ」

発言の方が俺を戦慄させた。戦闘自体は仁保姫の一方的な勝利であり、その際いくつかこの世界の戦闘ルールが判明。

・ダメージを食らうと、敵にも味方にもHPバーのような物があらわれる。

・モンスターは倒すと、ドロップ品や変な結晶になる。

・HPバーは徐々に回復し、Maxになると消える。

完全にゲームの世界に入り込んだようだ。

その戦闘の後は注意深く円陣を組み、周囲を警戒しながら固まって進んだ。森を抜けるまでにさっきの植物やゴブリんっぽいモンスターの襲撃を何回か受けたが、そのすべてを仁保姫が一人で撃墜していった。ロリっ娘こえー。

森を抜けてから草原に出る。遠くにウサギ型のモンスターやゴブリんっぽい人型のモンスターを見かけたが、こちらの人数が多いためか、遠巻きに見ているだけだった。それでも先ほどの不意打ちの恐怖は忘れられず、みな緊張して歩いていった。朝から歩き詰めのわりに、誰一人脱落者がいないのは、やはり身体能力が向上しているからか。

草原に入ってからのは回りも見渡せて警戒を強める必要が無かったの
で、メニューについて検証。目をつむり色々念じてみると、所有ス
キル一覧が確認できた。

『死』 『一撃死』

パッシブスキル。次の条件を満たした時、対象を即死させる。

- ・対象が攻撃を認識していない
- ・短剣による直接攻撃である
- ・攻撃が急所に当たっている

なるほどねえ。どうやら暗殺スキルらしい。だったら最初からスキ
ル『暗殺』にすればいいのに。とりあえず、いま使用できるのはこ
の『一撃死』だけのようだ。まずは短剣を入手しないといけないな。

王子とタクヤは全員で街に入る作戦を考えているようだったが、あ
まり興味がなかったので俺は話し合いに参加していない。まあ、あの二
人なら何とかしてくれるだろう。現実世界と電脳世界のカリスマが
組み合わせり最強に見えるってね。

昼前に街に到着した。見事な中世ヨーロッパ的ファンタジー調の建
物群。街というか村に近いというのが第一印象。周囲を堀と木の柵
に囲まれ、中央に森から川が流れ込んでいる。

当然のように人の出入りには厳しいと思って何パターンもの芝居を
考えていた王子たちの当ては外れ、意外にも問題は起きなかった。
言葉もふつーに通じたし。

どうもこの街は辺境開拓の拠点のような位置づけらしく、人の移動
についてはかなり大らかなようだ。さすがにこの世界では学校の制

服は浮いているようだったが（しかもみんなお揃いだから余計怪しい）王子らは逆に怪しさを逆手にとって門の兵士長らしいおっさんを丸めこみ、この街の領主と面会する約束を取り付けたようだ。まじめに聞いてなかったが要するに俺たちは流浪の騎士団みたいな位置づけになったらしい。とにかく街に入れないという事はなさそうだ。

「なんだ、クーは一緒に行かないのか？」

タクヤが意外そうな顔で尋ねてきた。横にさあきも心細そうな顔でいる。

「ああ、俺は先に街を見ておくよ。後で話を聞かせてくれ」

「じゃあ私もクーに付いていこうかな……」

「お前はタクヤたちと行け。邪魔だ」

ぶーぶーと文句を言うさあきを無視して俺はみんなと別れた。

やれやれ。やっと自由に動けるか。どうも集団行動ってのは苦手だな。

ぼりぼりと頭を掻き、まずは金からか、と独り言をつぶやきながら人が集まる市場の中に足を進めた。

1 放課後RPG（後書き）

『死』 / 『一撃死』

パッシブスキル。次の条件を満たした時、対象を即死させる。

- ・対象が攻撃を認識していない
- ・短剣による直接攻撃である
- ・攻撃が急所に当たっている

2 検証

2

この街はウルドと言うらしい。建物は木造が多く、森から流れ出る小さな川を中心に大小の家々が軒を連ねている。街の規模はそれほど大きくないように見えるが、中央広場には昼間から酒をかつ食らい騒ぐ人々の群れ、通りには人々が行き交い、なかなか活気がある。広場周辺には食品やら日用品やらの店が軒を連ねていて、お昼過ぎと言うことも有ってうまそうな匂いがそこから漂ってくるが、あいにく金がない。

怪しげな商品売っている露天商のおっさんに、ポケットに入っていた携帯電話を古代文明の遺産だとうそぶいたらずいぶん興味をもってくれた。光や音が出るのが珍しいらしい。細かな装飾がなされた短剣が目付いたので、これと交換でどうだと聞くと、そんなものでいいのかと即商談成立。電波の無い世界で携帯なんか持ってもしょうがないし、どうせすぐに電池が切れるだろう。おっさん、たぶん一日くらいしか楽しめないだろうな。どんまい。

あと仁保姫が倒したモンスターから出てきた結晶を見せて、これは買い取ってくれるのかと聞くと、魔石は冒険者ギルドに持っていけと言われた。やっぱりあるのか、ギルド。ちょうどいいので冒険者ギルドの場所も聞いて、おっさんと別れた。

冒険者ギルドはまとめると次のようなものだった。

- ・モンスターの素材を集めるか、賞金モンスターを狩ることが仕事
- ・お手伝い系の依頼は無く、要するにモンスター退治が専門との事

・報酬の高さがそのまま危険度であり、お決まりのランクは無いらしい

「薬品とか食糧と買って売ってる？」

「それならあちらのカウンターで少々」

「そうか。あと、魔法ってどうやって覚えるんだ？」

「スキルのことですか？それならどこでも売ってますよ。冒険者用スキルでしたら物品と同じカウンターで売っております」

「ってことはギルドって他にもあるのか？」

「ございます。戦士ギルド、魔術ギルド、迷宮ギルド、鍛冶ギルドなどが有名です。盗賊ギルドや暗殺ギルドなどは別の意味で有名ですね」

そんな感じで受け付けのお姉さんや売り子の少女から情報収集。貨幣ルールや周辺地理、政治体制やモンスターの位置づけなどの世界観はなんとなくわかった。特に変わっている所はスキルが売り物という点。魔石（モンスター倒したときに出る石）に封じられて、砕くと覚えられるとの事。拾った魔石でも良いのかと聞いたら基本的にダメとの事。要するに魔石は容器で、最初は不純物が詰っているが、それを抜いてから色々と詰め込めるカラクリらしい。素直に拾った魔石売って、とりあえず一つだけ買えた『ダッシュ』を使ってステータスをみたら、確かにスキルが増えていた。

他のギルドについても気になるが、武器も手に入れたし、とりあえずモンスター狩りに行く事にした。残りの金を食事と薬品に変えて、周辺モンスターの情報を聞いて草原へ出発。

都市周辺のモンスターは弱かった。森で出会ったような凶暴そうな怪物はあまり居らず、小動物にたまにゴブリンがいる程度だった。まあ、仁保姫のように簡単に倒せるというわけには行かなかったが、

十回ほど切りかければHPを削りきれぬ。AGIが高いせいか、敵の攻撃は簡単に避けられるので、とりあえず殺される心配はあまりなさそうだ。

さっきまでは仁保姫がぶん殴ればそれで済みだったからあまりグロい事にならなかつたのだが、やはりモンスターを刃物で切ると血がどばどばと噴出してくる。かなりのスプラッタ映像なのだがなんとなく現実感が無い。自分でも不思議に思うくらい何も感じなかった。モンスターと割り切れているのか、それとも自分でも知らないくらい『残酷』だったのか。まあ、あまり深く考えないことにしよう。

次に覚えたてのスキル『ダッシュ』について。これは、体感で2倍ほどの速度で走れるスキルだった。ただし直進限定。

これもAGIが高いせいか、現実世界よりかなり早く動いていたが、このスキルがあると、直進だけなら、原付並みの速度は軽く出せた。コントロールが難しいかつたが、練習すればなんとでもなるだろう。

次にスキル一撃死について。ダッシュも用いながら、何回かモンスターの背後から襲ってみたが、結構むずかしい。まあここが身を隠すものがあまりない草原だからかもしれないが。ちよつとでも気づかれたら発動しないし、また急所以外を攻撃すると失敗して通常のダメージしか与えられなかつた。そもそも急所に当てろつてのがきつい。人間型や動物型ならなんとなくわかるが、このてんとう虫型はどこが急所なんだよ。まったく。

何回か練習がてらにゴブや小動物を惨殺。死がスキルアップ。

LV 3
HP 197

STR 15
DEX 33
VIT 13
AGI 43
INT 18
CHR 30

スキル/死2 ダッシュ1

レベルも上がっていた。DEX、AGI、CHRの伸びが良い。DEXとAGIが上がるのは助かるが、CHRは上がったも意味なさそうだが。あと、ステータスはレベルで上がるのか、スキルアップで上がるのか。タイミングをしっかりと確認しないといけない。

練習の結果、この辺りのモンスターなら背後から即死させられるようになった。てんとう虫以外。

だいぶ日が傾いてきた。太陽が地平線に近づき、夕焼け色になり始める。ウルドの街は半面を深い森に囲まれており、反対側には草原が続いていた。その草原の真ん中を街道が延々と延びている。街道の先には商業都市、そしてその先にはこの国の首都があるらしい。

森は開拓を進めているようで、俺とおなじくモンスターを狩る冒険者、木を刈るきこり、耕作をする農民などの人々がそれぞれの仕事をこなしていた。夜が近づき、みな片付けの作業に入っているようだ。

俺もそろそろ街に戻るかと考え、市街に向かっていている途中、頭部だけ真っ赤なゴブリンを発見。冒険者ギルドで赤いゴブリンという記述の手配書を見た記憶があるのでおそらく賞金モンスターだろう。すこし悩んだ。背後から急所（ゴブの場合は首であることは確認済み）を刺せばおそらくはスキル『一撃死』で倒せる。しかし失敗してガチでの勝負になったとき勝てるかどうかは未知数だ。あきらかに他とちがって強そうだし。

さてさてどうしようかな。まあ薬品はいっぱい買ってほとんど使っていないからやってみようか。最悪全力逃げで。

相手の視線の外からのダツシユを開始。音を立てないように間に間合いを詰めて、最後は走り幅跳びのように水平方向にジャンプ。

一気に近づき、短剣を首筋に突き立てた。

一撃死が発動したようだ。HPバーが現れることなく、赤いゴブリンが光を纏いながら消滅する。大きめの魔石をゲット。ゴブの落とした棍棒やら汚い布きれとかはポケットに入りきらないのですべて放置。というか魔石だけでももうやばい。もちきれん。

冒険者ギルドに帰って魔石売却。カウンターの女の人が一個一個、鑑定スキルを使って値段を決めていた。赤いゴブ（ヘッドレッドと名付けられてたらしい）の魔石の時はちゃんと賞金をくれた。ギルド内のショップで収納用の袋を購入し、みなと合流するためにギルドを出た。

とある宿屋を貸し切って、クラスの連中全員分の部屋が確保されていた。どこにそんな金があったのかと思っただが、領主の計らいらしい。なぜここまで優遇されるのか腑に落ちないが、とりあえず今日得た情報を共有するために、皆で広間に集まった。俺は今日得た基本的な世界観とモンスターとの戦闘などについて報告。分かりにくい説明だったが、ゲームに詳しい奴らが噛み砕いて説明してくれるだろう。

次に領主との謁見に臨んだ王子の話。

騎士団を名乗るもやはり怪しまれる 実力を証明するために相手の護衛騎士と模擬戦 王子無双 領主感動 周辺の魔物退治を頼まれる 前金として金をもらう。

ありえない。漫画的に言うと主人公補正、またはご都合主義か。とにかく妙にウマくいきすぎている。この状況が物語なら間違いない。主人公は王子だな。

王子はみんなに魔物退治を手伝うことを提案。このクラスには男子17人女子20人の37人いたが、一人殺されてしまったため現在36人だ。全員で動くには多すぎるので、何人かに分かれてパーティを作って行動することになった。

たしかにこの周辺のモンスターは弱いから、戦闘に慣れるためにはちょうどいいだろう。

隣のさあきに、『解析』を使ってクラス全員のステータスを書き出

す作業をさせながら、話し合いの流れを見守っていると、タクヤが話しかけてきた。

「クー。組もうぜ」

「ああ。それは構わないけど、俺はさつさと別の街に行くぞ？」

「元からそのつもりだよ。みんなは王子に任せとけば大丈夫だし。じゃあ決まりだな」

「私も行く！」

さあきがかぶりつく様に話に割り込んできた。まあパーティを作れって言われてるしな。

「はいはい。わかったからさつさと作業を終わらせるよ」

「やった！二人ともよろしくね！」

カラカラと喜ぶさあき。満面の笑みを浮かべながらタクヤの手をとってぶんぶん振り回している。

「そうだ。クアラも誘おうよ！」

「仁保姫は大人気だろ。ほら、あんなに囲まれてる」

指を指した方向には、小さなツインテールが人に埋もれるように動いていた。みんなが仁保姫とパーティを組もうと取り囲んでいるからだ。あいつと組めれば安全ってことは確定しているわけだからそりゃ人気だろうよ。

「大丈夫。まかせといて！ほらタクヤいくよ？」

「へ？なんで俺も？」

さあきは戸惑うタクヤを強引に引っ張って仁保姫争奪戦の現場に突

進していった。あいつまだ作業終わらせていないのに。やれやれ。

「おい。空海」

「あん？」

見るとひよろつと背が高い坊主頭の男が笑顔で立っていた。

門倉 風 男。出席番号7。キングオブ童貞。かなりの強豪であるうちの野球部でレギュラーを張るくらいのだ。顔はまあ坊主だけど悪くは無いのだが、なぜかモテないことをよく俺に愚痴ってくる。なぜだろうね。いまでも爽やかなスポーツマンスマイルで純粋な目をキラキラさせているのに。

「この世界に性奴隷っているかな？」

前言撤回。嬉しそうな顔しながら何を言ってるんだこいつは。さっきまで爽やかに見えていた笑顔が一気にうさんくさく見えてきた。

「この街では奴隷市は無さそうだったが。東の教国でも禁止されてるらしいし」

「なんだと!」

「でもこの国は西の帝国寄りだからどこか大きな町なら売ってるんじゃないのか？」

「よしきた!」

ガツッと音がしそうなほど大げさなガツポーズをしてからこのハゲは言い放った。

「おれは奴隷ハーレムを作るぞ—————!!!!!!」

だめだこいつ……。早く何とかしないと……。

「金を貯めて、アジトを作って、そこで女を囲う。5人、いや10人は欲しいな。巨乳に口りに金髪に褐色に姉妹丼、ああこの世界ならエルフや獣人もいるのかな。やっべ！ちょー興奮してきた！」

「たしかに奴隷ハーレムって男のロマンだけどさ、実際には金も掛かるし、結構面倒だとおもうんだが……」

「お前はさっさと他の街に行くんだろ。おれもついていくぜ！そして奴隷市を探す！」

無視された。まあバカで童貞で暑苦しいやつだが、悪い奴ではないからいいか。これで4人。と思ったら仁保姫争奪戦に出向いていた二人がお目当て連れて帰ってきた。どうゆうトリックを使ったのかと思っただが、仁保姫がさあきの後ろで顔を赤くしながらタクヤを見ていたので、そうゆうことかと納得した。

これで5人。数としてはいい感じだ。俺たちはすぐにこの街を出る予定だし、こんなもんだろう。この街でレベル上げしているほうが安全なことは確実だしな。

とりあえずリーダーはタクヤに決定。明日は朝から手分けして旅の準備を整えて、明後日出発ということになった。

3 チュートリアル

3

異世界二日目。今日は手分けして旅の準備をすることに。俺は情報収集と称してギルド巡りへ。まずは魔術ギルド。ローブに例の帽子をかぶった魔法使いが見れるかと思いきや、座っていたのはヒゲ面のいかついおっさんだった。ダボダボのスラックスにエプロン姿で読書中。あまり魔法使いには見えない。気を取り直して店員のおっさんと世間話をしながら魔術について話を聞いた。

- ・この世界では火水土風の術が一般的
- ・スキル習得用ではなく、魔術自体がが込められた魔石もあった。
- ・魔術を生活に利用するのが仕事らしい。

「この魔術の込められた魔石っておっさんがつくってるのか？」

「ん。魔封石のことか。まあ俺がやってるのもある。値段が高い奴はマスターが作ったり、他の街のギルドから仕入れたりしたりしてるやつだな」

「それって簡単にできる？」

「まあな。ある程度スキルを上げれば低ランクの術なら簡単だ。上位魔術は魔石の質も重要だから難しい」

「なるほどねえじゃあさ。魔術って使いすぎるとどうなるの？」

「そりゃぶっ倒れるさ。」

「ふーん。あと、魔術ってその4つ以外にもあるの？」

「あるぞ。ヴァナヘイム教皇の神術や伝説の竜術とかだな。まあどれもお目にかかるのすら難しいが」

どうもこの世界の魔法使いは技術屋っぽいなというのが感想。モン

スターからでた魔石を生活に利用しているようで、この魔法ギルドにも火術をこめた魔封石を埋め込んだカンテラや水術をこめた魔封石を埋め込んだ水筒など、便利そうなものが並んでいた。魔法については大体わかったのでとりあえず一通りのスキル魔石とカンテラ、水筒などを買って魔術ギルドを後にした。

次に戦士ギルドにやってきた。ここは護衛や用心棒の依頼の取り扱いをしているようだ。運搬やら盗賊退治とかもある。どうもこの世界では、

冒険者ギルド⇨モンスター関連
戦士ギルド ⇨ 犯罪・生活関連

と住み分けをしているようだ。

スキルは武器スキルを中心に置いてあったので、みんなの分も買っていくことにしよう。俺は短剣。タクヤは後衛だから魔法杖と。さあきは何だろ。てきとーに棍棒にでもしておくか。鬼に金棒ってね。仁保姫はもうすでに天賦の才（格闘）があるからいらないか。フーのハゲは…あの能力じゃあ必要なさそうだが、一応片手剣くらいは買っておこう。

しかしこうして考えるとこのPT前衛少ねーな。俺は特殊職だしタクヤは魔術職、フーは遠距離で、さあきにいたっては戦闘向きのスキルですら無いか。まあスキルも調整していけばなんとでもなると思っが。

その時、一人の女が店に入ってきた。見慣れたウチの高校の制服だ。目が合つて軽く会釈をしてくる。こちらも、よっ、っと手を上げて返事をしたが、さて、誰だっけ？見たことあるような顔だが、名前が出てこない。落ち着け。とりあえずいつも通り知っている振りを…

「六道。六道あやね。実際に話すのは始めてだね、一橋君」

名乗られてしまった。あーそんな名前のやつもいたね。

六道あやね。女。たしか出席番号が一番後ろの37番だったはず。ポブカット気味の黒髪と整った顔立ち。美人ではあったが無口で、いつも一人でいる目立たないタイプだった。はず。もちろん接点はないのでよく知らない。

「お前も面白い物か？」

「うん」

一言答えて、黙る六道あやね。その無表情からはなにを考えているのかさっぱり読み取れない。たしかに美少女なのだが、どこか影があるといった様子だ。わりと苦手なタイプかもしれない。

多少の居心地の悪さを感じていると、六道が距離をつめてきて、上目遣い気味に言った。

「一橋君たち、すぐに街を出るのよね？私も連れて行って欲しいな」

「……それは構わないが、王子達といった方が安全だと思うけど。一応理由を聞いてもいいか？」

「笑わない？」

「ん？ああ」

「ほんとに？」

「笑わないって」

「私。魔王になりたいの」

「……は？」

夕暮れ時の教室で物思いにふけり世界の子供達が飢餓で死んでいくのに戦争をやめようとしないうるかな人類を嘆いていそうな高貴で清楚なこの美少女は、魔王になることをご所望らしい。なるほど。世の中不思議が一杯だ。

「一応理由を聞いてもいいか？」

「だから、魔王になりたいの」

「いや、そうじゃないくて、その魔王になりたい理由」

「それは……」

顔を真っ赤にしながら下を向いて恥ずかしがる六道。

「悪い。ちょっと意外すぎて動揺した。忘れてくれ。うん。ちょうど今5人しかいなかったからちょうどいい。一緒に行こう」

何がちょうどいいのかわからなかったが、慌てて了承した。余りに意外な理由に何も考えずに聞いてしまったが、人には聞かれたくないことぐらいあるよな。うん。

心底ほつとしたような顔で礼を言う六道。一瞬赤くなった顔もすぐに下の無表情に戻って、やっぱり考えが読めないが、まあいつか。

六道の武器スキルも買い、次の店で一通りの武器を買ったところで午前中の買い物を終えた。

その日の昼過ぎ。入り口の門から草原に出てすぐ見える小高い丘の上にパーティの面々が集まった。目的は戦闘演習。というより初心者チュートリアルである。

「ってことで今からおまいらにロープレの基本と戦闘について教えてくからちゃんと聞けよー」

「はいはい先生」

3人目の女の子が入ってかなりご機嫌なさあきが調子良く手を振りながら、さっそく話の腰を折った。

「タクヤがいらないけどいいの？」

「タクヤはまだ街に用事があるってさ。それにこれから教えるのは基本だからゲーム上級者キリッの俺らにとっては当たり前前の事なんだよ。んじゃはじめるぞ」

はいいと生返事をするさあきと先ほどからメモを構えて準備している仁保姫。ニヤニヤとやり取りを見ていたフーと無表情の六道。この中でRPGの知識があるのは、男子のフーと、昔、俺がやってるゲームを横で見てたさあきと、実は結構詳しそうな六道の三人。しかし、前の二人はまともにプレイした事はないらしいし、仁保姫にいたってはゲームに触ったことも無いという事で、基本的なことから説明することになった。

「用語からやるぞ。まずLv、レベルのことだな。これはだいたい

の強さのことだ。高いほうが強い。上げることで強敵を倒せるようになったり、強いボスを倒せるようになる。だからレベリング、つまりレベル上げがPRGではとても重要になる」

「次に、HPつてのは生命力のこと。ダメージを食らうと減少する。戦闘していると頭上に現れるバーはこれを表しているみたいだ。一般的にこれがなくなると戦闘不能になる。この世界の戦闘不能ってのがどういう状態なのかは分からない。これは試してみるわけにはいかないしな。まあ現状では、石内のやつの件もあつたし、おそろく死ぬと考えたほうが良いだろう」

四人の顔が一瞬強張る。石内とは昨日街に来る道中、森でモンスターに襲われて死んだクラスメイトの事。その時は実際にHPが0になった瞬間を目撃した訳ではなく、体の一部分を目撃したというだけなので、HP0即死亡なのかどうかは正確にはわからない。しかし甘い予想はしないほうが良いだろう。

「次に細かいステータスな。おおざっぱに言うと、STRは力、DEXは器用さ、VITは体力、AGIは素早さ、INTは知力、CHRはカリスマか魅力の事だけど、どつちかはまだわからん。大体言葉の意味そのままの意味があるはずだ。じゃあ自分のステータスで一番高いやつと一番低いやつの数値を言ってみろ」

「えーと。高いのはINTで25。低いのはAGIで10かな」
さあきの答え

「一番高いのはSTR33で低いのはINTとCHRが同じで8です」仁保姫の答え

「高いやつはDEX27とAGI23だなー。INTは一桁だぜ。あとは10台」フーの答え

「高いやつはSTR25、低いのはVIT15」六道の答え

「さあきによると、街の人たちのレベルもステータスはほぼ一桁で、門衛や騎士でやっとステが二桁になるらしい。ようするに俺らのステータスは一般人の数倍はあるってことになる」

「つまりこの世界では俺らはケンカに強いってこと？」

坊主頭のフーが質問する。

「数値上はそうだな。それと、この辺のモンスターのステータスも似たようなものだ。さあき、あそこにいる角ウサギのステータスを読んでみる。ああ、数字だけで良いぞ」

「えーと。ホーンラビット。HPが51でLv2、ステータスは上から7/8/5/10/3/5」

さあきのスキル『解析』。人、モンスターはもちろん、武器、アイテム、建物にいたるまで情報を得ることが出来るようだ。さあき自身は視界に何か入るたびにインターネットのポップアップのように各種ウィンドウが出てくるらしく、それを処理するためにいつも忙しそくに、指で空中に絵を書いている。外から見ると結構怪しい。

「実際、昨日この辺のモンスターと戦闘したけど楽勝だった。後から戦闘に慣れるために戦ってもらうからよろしく」

うーい、っとフーの気の抜けた返事だけが帰ってきた。他の三人もちゃんと頷いているから大丈夫だろう。

「最後に今のところ分かっている戦闘システムについて、重要な点3つを教えとく。一つ目は技の使い方。『スキル』+『技名』を口に出すか、念じれば良い。魔術も同じな。対象を取ったりするタイプの技は使い方は、おれは持ってないから良く分かんが、タクヤ

が言つにはあれに当てたいと思つてれば大丈夫だつてさ。六道、俺に『ブラインド』を掛けてみて」

そつゆうと六道は無言で立ち上がり、ゆっくりと細長い人差し指を俺にむけ、つぶやいた。

『闇術』『ブラインド』

その瞬間、指から黒い霧が沸き立ち、一瞬で俺の頭を包みこんだ。さあきと仁保姫の驚く声が聞こえる。視界が一気に暗くなり、目の前にいる六道たちの姿さえ確認することが困難になつてしまった。

六道のスキル『闇術』。呼んで字のごとく闇の魔術。王子が『光術』のスキルを持つていたはずだから、それと対になる魔術だろう。今使えるのはこの視界妨害の『ブラインド』だけらしい。

真つ暗な視界の中説明を続ける。

「使用方法はこんな感じ。2つ目に大事なのはこの世界にはMPが無いこと」

「MP?」

もつともゲームに疎い仁保姫の声がした。

「そ。マジックポイントのこと。RPGには普通、『この魔法を使うためにはMPがポイント必要』、ってシステムがある。でもこの世界にはMPというステータスはない。その代わり魔術をつかつたら『HP』を消費する。今魔術をつかつた六道にはHPバーが出ているだろ?」

ようやく晴れてきた視界の中、六道の頭上にすこし減少したHPバーが見えた。今のでHP10消費って所かな。

「自分のHPは減少したら視界に現れる。死にたくなかったら常に自分のHPを把握しとけ」

MPが存在せず、魔法を使用する場合にもHPを使用するゲームは余り無いが、スキルを使用する時にHPを消費するゲームは結構ある。この手のゲームでよくやるミスが、スキルを使いすぎて気がついたら瀕死という奴だ。しかもこの世界にはさらに特徴的なことがある。

「最後に3つ目。回復魔法が無いことだ」

「回復呪文って言うത്『ホ ミ』とか『ケ ル』とか？」

ゲーム経験のある男子のフーが某有名RPGシリーズの魔法の名を上げた。

「そうそう。もうちょっと正確に言うと『瞬間回復魔法』が無い。

すくなくともこの魔術ギルド確認した限りではそんな効果の魔術はなかったし、薬品も全部試してみたがだめだった。代わりにHPは徐々に回復していくし、回復速度を増加させる薬や魔術ならあるから、それで何とかするしかないな、ま、要するに…」

「要するに、HP管理がとても重要、ということでもいいかしら？」

六道が先回りして言った。やっぱりこいつは結構やってやがるな。

「ん。そうゆう事。何度も言うが、戦闘中は常に自分のHPを意識しろよ。んじやてきとーに敵を倒してこい。一回戦ったらHP回復するまで待ってから次の戦闘に行け。あと、あんまり遠くに行くな

よ

「「おー！」」

四人はそれぞれ真新しい武器を手に持ち、丘を下って草原に散っていった。

最後に六道も言っていたが、この戦闘システムではHP管理をミスると致命的である。なにも考えずに魔術を戦闘に用いていたら、あつという間にHPがなくなってしまう。そして、慌てて回復しようにも、徐々に回復させるしか手段がない。リアルタイムの戦闘でこれはなかなかきつい。とりあえず、余裕で勝てる相手でHP管理をしつかり習得させないといけない。連携とか陣形とかそこらへんは後からタクヤと考えよう。

その日は日が暮れるまで、街の周辺で戦闘にいそしんだ。途中からタクヤも合流して、簡単に6人での戦闘訓練もして、宿に戻った。

「明日出発するようですね」

「ああ。タクヤから聞いてると思うが、まあこっちは勝手にやるから気にするな」

その夜。一人でいるところを王子に話しかけられた。このイケメン生徒会長は、俺たちが街を離れると聞いて心配しているようだ。

「クーさんはすごいです。この状況にも最初からあまり動揺してい

ない様だし」

「は？いやいや、王子の方がすごかっただろ。領主の館での話は聞いたが、とてもじゃないが信じられんぞ」

「ははっ。まあ、たまたまです」

そういつて、照れながら頭を掻く王子。その様子は、見たら9割の女子がときめく様な破壊力のあるしくさだ。おれが女子ならキョーン死にしてるね。くそ、イケメン爆発しろ。

そんな俺の葛藤を無視して、今度は深刻な表情で質問してきた。

「元の世界に戻れると思えますが？」

「……それはわからないな。なぜ突然この世界に来たのかもわからないし」

「そうですね……」

「まだこの世界の事ぜんぜん知らないわけだからな。何も言えん」

「今日、一人、石内くんが死にました」

「……あれはお前のせいじゃないだろ。不意打ちだった」

「僕はこれ以上クラスメイトを死なせずに、みんなで現実世界に戻りたいと思っています。クーさんも絶対死なないでください」

こいつは人が良くて責任感が強い奴だ。何でも一人で背負いこんで、それを解決できる能力がある。それが美点でもあるし、弱点でもある。

「……っは。俺らより自分の心配をした方がいいぞ。ここは現実じゃなくて剣と魔法のファンタジーRPGの世界らしいからな。油断するなよ」

「あはは。大丈夫ですよ。クラスのみんながいますから」

『そのクラスのみんなってのに油断するなよ』

そう言いかけたが、途中で止めた。俺の杞憂かもしれないし、第一こいつにそんなこと言ってもしょうがない。完全無敵のこの王子様はいつだって俺の予想を超えてくるからな。

3 チュートリアル（後書き）

『闇術』 / 『ブラインド』

HP消費小。対象の視界を奪う。効果時間・効果範囲は『闇術のスキル』に依存。

4 戦闘

4

「ちっ、多すぎだろ」

片手剣を半身に構えながら、フーが悪態を付く。他の仲間もみな、武器を手にし、依頼主である商人の馬車の後ろに付き従っていた。取り囲むゴブリンの群れ。馬車は歩くよりすこし速い程度で、なんとか逃げ出そうと走っている。前方は商人の私兵が先導し道を切り開いているようだ。

状況を三行でまとめると、

場所は商業都市に向かう街道

戦士ギルドで商人護衛の依頼を受けたら

ゴブリン軍団襲来・総数98匹

という感じ。

こうゆう事があるから護衛依頼なんてものがあるんだろうが、いかんせん多すぎないか？しかも街の周りにいた野良ゴブよりかなり強くて統率が取れた動きをしゃがる。知性の高いリーダーがいるらしい。

前のほうにいたゴブリン5匹が同時に飛び掛ってくる。今度の狙いはさあきようだ。六道が一匹に『ブラインド』を発動し、視界を奪う。また、仁保姫が横からとび蹴りを繰り出し、二匹を吹っ飛ばしてHPバーを半分ほど削るが、残り二匹の攻撃は止められなかつ

た。さあきのHPゲージが6割ほどまで減少する。視界を奪われたゴブリンは、残りの3人でふるぼっこにして消去。

「さあき！後何匹いる！？」

「えっと、えっと。ノーマルが74　ファイターが11　メイジが3　リーダーが1！」

タクヤの声にさあきが応える。さあきの解析スキルは敵の総数と内訳もわかるらしい。思った以上に便利なスキルだ。まだまだ他にもわかるのだろうが、今はそれどころじゃない。戦闘開始から結構たつのに敵の数がほとんど減っていない。

「これでやっと10匹程度か…」

「ああ。このままじゃまずいね。ここはやっぱり…、フリー！魔法攻撃だ！」

「オツケー！任せろ！」

ゴブリンの群れの後方から二つの火球が飛んできた。大きさは一時期流行った、バランスボールくらいはある。ゴブリンメイジの火術『ファイアボール』だ。

フリーは片手剣を鞘に戻し、火球の前に立ちふさがると、それぞれ片手づつで、二つの迫り来る火球を掴み取り、しばらく燃え盛るその火の玉を涼しい顔で弄ぶ。そして勢い良く飛び上がり、ゴブリンの群れに向けて、手にした火球を投げ返した。どうやら先ほど仁保姫が蹴り飛ばしたゴブリンを狙ったらしく、HPバーを失ったゴブリンが一匹消滅する。

フリーの能力『クラブ』と『スロー』。クラブは有形無形にかかわらず、掴めると思ったものは掴める能力で、スローは投げつける能力らしい。それぞれ単体でも使えるが、今回のように魔術相手にはか

なり卑怯な能力である。事実、ゴブリンメイジに対し強力な抑止力となつて、最初の頃は連発してきた魔術による攻撃はかなり頻度が落ちていく。

敵攻撃の主力であるゴブリンメイジの魔術はフーによって抑えられていた。しかし、物量を生かした波状攻撃を前になかなか数が減らせず、こちらだけが消耗していく。このままじゃあまずいかもな。

「クー。このままじゃギリ貧だ。ここはやっぱりアタマ狙いでいこう。さっき言つてたあの連携で」

「おけ。ぶつつけ本番だな。まあたぶん大丈夫だろ」

「よし。みんな聞いてくれ！」

タクヤが素早く指示すると、すぐに六道と仁保姫が動き始めた。

六道の武器は巨大なバスタードソードである。なぜこの武器を選んだのかは教えてくれなかったが、とにかく比較的高めのSTRも手伝つて、軽々と身の丈以上はある大剣を降りまわしていた。単純な突破力なら仁保姫よりも強い。その六道と、戦闘力と体力ではダントツの仁保姫の二人が、密集したゴブリンの群れの中にまっすぐな道を作つて行く。途中ゴブリンメイジの魔術を受けHPバーを削られながらも、二人はなんとか密集地帯を切り抜け、他のやつらより一回り以上デカく、立派な装備をしたゴブリンリーダーに迫つた。

側近と思われるファイター二匹がそれぞれ六道と仁保姫が牽制し、突進がとめられてしまう。直後、二人の背後からゴブリンリーダーにむけてタクヤが飛び掛つた。巨大なメイスを手に迎撃体制に入つたリーダーに対して、タクヤは空中で交差した腕をバツと開きながら叫んだ。

『時術』 『ポーズ』

タクヤのスキル『時術』。時を操れるらしいが、今のところ使えるのは『対象を3秒間停止させる』という『ポーズ』だけ。ちなみに使用前の動作は特に必要ない。タクヤの趣味だ。

『ポーズ』は確かに強力だが、3秒というのは余りにも短い。3秒間では、停止中に一撃叩き込むのがやっとという所。それでは普通ゴ布林リーダーのような強敵は倒せないだろう。だが、今回は一撃で十分。俺がいる。

タクヤが飛び上がってリーダーの視線と時間を奪った直後、俺は前衛の女子二人の影から飛び出していた。派手な三人の動きに隠れてこそそ動いていたので、おそらくリーダーには認識されてない。一気に距離をつめて、正面からリーダーの首筋に短剣を突きたてる。分厚い皮膚は思った以上に硬く、表面を傷つけたただけであったが、狙い通り俺のスキル『一撃死』が発動し、HPバーが現れることなくゴ布林リーダーは消滅した。

その後、ゴ布林リーダーを失った群れは劇的に統率を失った。中には闇雲に突撃してくる個体もいたが、そのほとんどは散り散りに逃げ去り、俺たちは危機を脱した。

タクヤと話していた連携とは『ポーズ』と『一撃死』のコンボである。

『一撃死』の説明では敵に認識されて無ければ発動するとある。じゃあ認識されていない状態で『ポーズ』で時を止めれば正面からいつでも『一撃死』発動するんじゃない？

という考えを歩きながら話していたのだが、ばつちし発動した。これが可能ということは一撃死は不意を突いて背後から襲っただけじゃなくて、もっといろんな使い方が出来そうである。

残ったゴブリンを処理し、戦利品を回収していると、依頼主の商人が俺たちの元にやってきた。

商人の私兵が二名ほどやられたそう。俺たちがいなけりや確実に全滅だったらしい。えらく働きを褒められ、今回の撃退戦で得られた戦利品は報酬にすべて貰えることになった。身内が二人も死んでいるのに太っ腹なおっさんだ。さらにスクルドに来たときは頼るといいと言ってきた。結構力のある商人との事。自称だが。

その後、街に着くまでタクヤは商人のおっさん（ああ、そうそう名前はエギル）とずっと世間話をしていた。

情報収集はあいつに任せておいて大丈夫だろう。その後は特に問題も無く、次の日の夕方には街に到着した。

4 戦闘（後書き）

『火術』 / 『ファイアボール』

HP消費中。火球を作り出す。大きさ・数は『火術』スキルに依存。

『時術』 / 『ポーズ』

HP消費特大。敵一体の時間を止める。効果時間は『時術』スキルに依存。

『Grab』 / パッシブスキル

あらゆるものを掴める。

『スロー』 / パッシブスキル

あらゆるものを投げられる

5 方針

5

商業都市スクルド。高い市壁と水の貼られた堀に囲まれた大きな都市だ。石造りの家々に活気あふれる市場。三方には巨大な門と税関が設置されており、残りの一方は川に面していた。城はなかったが、中心部には中々立派な屋敷が軒を連ねており、経済的にはこの国の中心地であるらしい。

エギルのおっさんと別れ、戦士ギルドで今回の護衛の報酬を貰った時には、すでに空が暗くなり始めていた。俺たちは急いで寢床を確保するために宿へ。

「これからの事なんだけど」

部屋を確保し、荷を下ろして一息入れていると突然タクヤが切り出してきた。今後の方針について相談があるそうだ。今いるのはフリーとタクヤと俺の男子だけ。女子陣は長旅と野宿のせいでもかなり不快だったらしく、揃って水浴びに出かけている。まあすぐに戻ってくるだろう。

「大きく分けて、三つほど考えてる。一つ目は今回みたいに戦士ギルドで依頼を請け負う事をメインに行動すること。この場合のメリツトは情報と人脈」

「情報と人脈？」

と、フリー。

「うん。今回の依頼でもエギルさんという商人と知りあえて、いろいろ話も聞いた。モンスターやアイテムの情報とか、噂話とかね。戦士ギルドの依頼で護衛や運搬をしていれば、もっとたくさんの人とも知り合えるだろうし、いろいろ情報も手に入れやすいと思う。これは結構大きい」

「ふーん。なるほど」

「デメリットは金はそんなに稼げない点と、あまりモンスターと戦えない所かな」

「それは確かに良く無いな」

モンスターと戦闘をしないと強くなれない。検証した結果、ステータスを上げるためにはスキルを上げるか、モンスターと戦闘してレベルを上げなければならぬ事が分かっている。スキルを上げるにしても、非戦闘スキルならまだいいが、戦闘用スキルはやはりモンスターと戦闘しないとなかなか上がらない。レベル・スキルは上げておいたほうがいいと思う。RPGの世界で強いに越したことはないからな。

俺も金が稼げたほうがいい。はやくハーレムを作りたいから。などとフリーがほざいているがとりあえず無視な方向で。

「二つ目は冒険者ギルドでモンスター退治をメインにすること。これのメリットは戦闘が結構出来るのはもちろん、金もなかなか稼げる。強めの賞金首を倒せば、一匹金貨10枚とかになるみたいだからね」

この世界の金貨1枚は現実世界での10万円くらいの価値である。貨幣にはあと銀貨と銅貨があつて、それぞれ100枚づつで銀は金と、銅は銀と交換できる。この部屋を借りるのに銀貨10枚で、パンがひと切れ銅貨2、3枚。装備品とかはピンきりだが、まあ銀貨50枚あればだいたい買える。金貨10枚あれば6人で一ヶ月は宿を借りながら生活できる計算だ。ちなみに今回の護衛報酬は銀貨50枚。

「一匹金貨10枚か、それなら……」

フリーが視線を浮かせてぶつぶつと独り言をつぶやいている。そういえばこいつもエギルのおっさんに色々聞いているようだったから、^{ハレム}夢に向けて行動を開始しているのかもしれない。

「後、自由に動けるつても魅力。早い段階で外の国にも行けそう
だ。戦士ギルドの依頼生活じゃ、どうしてもこの街か王都での仕事
が多そうだからね」

「リスクは高いかもしれんな。賞金首つてのはやっぱし強いんだろ
うし」

「たしかにね」

「ねえねえ。なんの話してるの??」

水浴びを終えて女子組が帰ってきた。水に濡れた髪を横にくくつたラフなワンピース姿のさあきが、とことこ近寄ってきて俺の横に座る。他の二人もさっぱりした様子で、布切れで髪を吹いている。ちなみに結構前から服装は現地の裁縫屋で買った洋服になっていた。さすがに現代の制服はこの世界ではういてしまつて恥ずかしいらしい。

「これからどうするかという話し合いだよ。今話するのは冒険

者ギルドでモンスター退治の旅をするのはどうかって話」

「えー旅は嫌だなあ。野宿とかするんでしょ？今回も結構つまかったのよねー」

ぐちぐちと旅に文句を言い始めるさあき。仁保姫もうんうんと頷いているところを見るとやはり女子には野宿はきついらしい。すぐに慣れると思うが。

「それでタクヤ。三つ目はなんなんだ？」

「ああ。これはさっきのエギルさんからの依頼になるんだけど、『
迷宮探索』って言えばいいのかな」

「迷宮？探索？ってどうゆうこと？」

さあきが首をかしげながら質問する。

エギルの話によると、この世界には迷宮が各地にあり、特に珍しいものでもないそうだ。迷宮内では大量のモンスターが発生しており、放置しておくとも迷宮の周りでも強力なモンスターが出現しやすくなる。この世界の人はその現象を、迷宮からモンスターが染み出してくると表現するらしい。

この世界では、この『染み出し』対策と、モンスターからの資源（魔石やドロップ品）を得るために迷宮を管理している。つまり、迷宮のそばで住み込みながら迷宮探索をしてモンスター退治をして染み出しを防ぎ、その際出るドロップ品で生計を立てる人たちを探索者と呼び、基本的には迷宮ギルドがこれを土地の所有者から依頼を受けて管理しているそういだ。

「最近エギルさんが買い取った土地で迷宮が発生したらしくて、探索者を探してたんだって。それで良かったら俺たちに頼みたいって

言ってたんだ」

「よくわかんないですけど、それって得な話なんですか」

ベッドの上にちょこんとすわった仁保姫からの質問。さあきと同じくワンピース姿だが、いつもしているツインテールではなく、後ろで括っているだけの髪形になっているので、すこし違和感を感じる。

「んー。レベル上げと金稼ぎという点では他の二つよりはダントツで効率が良いだろうね。なにせ狩場の前で生活するってことは、基本的にずっとモンスターを狩れることになるから」

「ざつと考えて、一日100匹倒せば、確実に魔石が100個とれる。ウルドの街で俺が周辺のモンスターから拾った魔石がだいたい、一個銅貨50枚だったから、最低でも銀貨50枚、つまり今回の護衛依頼並みには稼げる。しかもこれは最低品質の魔石計算だから、実際にはもっと品質の良い魔石も取れるだろうし、他のドロップ品もあるからもっと稼げるだろうな」

俺の説明にいまいちピンと来ない女子陣だったが、唯一窓際で話を見守っていた六道が反応した。

「デメリットは迷宮のある場所に縛られてしまっって所かしら？」

その質問にタクヤがうなづきながら答える

「そうだね。ほかの二つに比べて、情報を集めるといいう目的には都合がよくない。街からも離れて圧倒的に引き籠ることになるから、人とも付き合いつらいだろうな」

話をまとめると

戦士ギルドメイン	情報○	人脈	戦闘×	収入
冒険者ギルドメイン	情報○	人脈	戦闘○	収入○
迷宮管理	情報×	人脈×	戦闘	収入

といった感じ。

「俺は金がほしいから迷宮がいい」フーの意見

「私は旅がしたいな。探したいものがあるから」六道の意見

「わたしはできれば街に滞在できたほうがいいですけど……」仁保姫の意見

「お前はどうかんだよ」

俺は隣の幼なじみの頭を叩く。さあきはむっとした顔をしながら俺の手を払うと、少し考えてタクヤに質問をした

「めいきゆうたんさくってのは住み込みって言ってたけど、それってずっと野宿するってこと？」

「いや、違うよ。エギルさんの話だと簡単な小屋を目の前に建てたから、それを使えばいいって言ってた。どれくらいな物なのは知らないけどね」

「え。じゃあ住む家があるんだよね？じゃあそれがいい！」

こいつそーとー野宿が嫌みたいだな。ホームシックか？似合わん。まあそれはいいとして、俺も意見を出さないと。

「俺は冒険者ギルドがいいな。俺の能力も賞金首を仕留める方が向いてるし、現実世界に戻る方法も探さないといけないから世界も見たいからな」

これで冒険者ギルド2、迷宮探索2。二択には減ったが、結局はタクヤが決めることになったな。

「んー。俺はこーゆー自由度の高いRPGじゃあ初期は金策とレベルリングに励むのが得策だと思う。話はそれから進めても遅くはないだろうし。だから、迷宮探索の話を受けようと思うんだけど、クーと六道、それと仁保姫はそれでいいかな？」

「わたしはみなさんについていきます！」

仁保姫は慌てて答える。六道も無言で頷いた。あいかわらず考えの読めない表情だったが、まあ大丈夫だろう。

迷宮探索か。タクヤの言うとおり、とりあえず集中して金と経験を稼ぐって方向も間違っていない、か。リーダーはタクヤだ。

「俺も問題ないよ」

「決まりだね。じゃあ俺は明日すぐエギルさんの所に話を通しに行ってくる。ついでに必要なものがあるか聞いてくるから、昼からはみんなで準備を整えるってことで。出発は明後日の朝にしよう」

「「はい」」

6 契約

6

「そうですか。引き受けてくださいますか」

次の日の午前中。俺はタクヤに付いてエギルの屋敷を訪ねていた。来客用に装飾された広間に通された俺たちは、エギルとの交渉に望んでいる。俺は勧められた椅子に座らずに、険しい顔を作りながら壁際に腕を組んで立っていた。

そっちのほうがかっこいいだろ？

つてのは冗談で、俺はこちらが不利になる条件を出されないように牽制する役回りである。たまに短剣を鳴らして、「舐めた条件は承知しねえぞ？」みたいな顔をしてればいい。おそらく、百戦錬磨の商人であるエギルに脅しなんか意味ないであろうが、まあ無いよりまし程度である。

小一時間ほどの交渉の末、契約内容は次のような感じになった。

- ・ 契約期間は迷宮を消滅させるか、最長半年。
- ・ 素材の売却には週二回、エギルから回収の為に使いを出す
- ・ 魔石は最低でも銀貨1枚。他の素材もモノにより買い取るとのこと

「迷宮を消滅というのはどういことなんですか？」

「迷宮の最奥にある魔方陣を壊せば迷宮は消滅する、という話なの

ですが、実際に最奥までいける人間は迷宮ギルドの連中でも一握りでしょうな。もちろん私も行ったことはございません」

「毎日これくらいは敵を倒せ、とかノルマみたいなものはありますか？」

「そうですね。染み出しを防いでくれる程度には働いてもらいたいですな。具体的には迷宮ギルドの方に聞いた方が良いと思いますよ」

エギルは迷宮についてはあまり詳しくないようだ。迷宮ギルドに依頼申請をしにいかなくてはならないようなので、その時に人に聞いてみよう。情報は集めとかないとな。

少々の雑談の後、昼前にはエギルとメイドたちに見送られて屋敷を出た。メイドいいよねメイド。

「さて、昼までまだ時間あるし、迷宮ギルドへ先にいっておこうか」
「ん。さあき達もいたほうがいいかもしれないが。まあ、後で説明すればいいか」

ちなみに、フーのハゲは見に行くところがあると言って朝から姿を消した。行き先はだいたい予想できる。女子組はなにやら女の子だけで買物があるというて出かけてしまった。こっちは荷物持ちに駆り出されなかっただけよしとしよう。

「契約についてどう思う？」

「悪くないだろ。ドロップ品を一括に買いあげられるのはちょっと損かもしれない程度かな」

「んー。輸送手段の問題があるからねえ。四次元ポケット的なアイ

テムボックス機能があればいいんだけど。それなら溜め込んで街に持っていけるのに」

「だな。この世界、アイテムについては現実的なんだよな。ステとかレベルとか実装するくらいなら先にそっちを実装したいって欲しいわ」

「それ、誰に要望してるの？」

通りすがりの人に道を訪ねつつ10分ほど歩いた。迷宮ギルドは街の中心から少し外れた通りにあり、戦士ギルド、冒険者ギルドも同じ場所にあったので、この辺はギルド横丁と言ったところなのだろう。

中には入りカウンターのお姉さん（猫耳）に、エギルさんから受け取った依頼書を渡す。すぐに手続きが終わり、ひと振りの魔物の毛皮で出来た旗をもらった。これは要するに『この迷宮は専属契約ですよ』という目印らしく、迷宮の近くに立てとけとの事だ。

その後も、迷宮についての疑問をタクヤと二人でネホリハホリと聞いてみると、猫耳のお姉さんもさすがに面倒になってきたらしく「仕事がありますので……」と行って逃げていってしまった。それでも迷宮についていくつか重要な点が分かった。

- ・ 最奥に魔方陣があり、それを壊せば迷宮はやがて消滅する
- ・ 階層どこまであるかは不明。最短では10階くらいだし、100階以上の迷宮もあるらしい
- ・ 入るときは必ず一階から。また、入るたびに構造が変化するということは無い

・ 宝箱もあるのが、開くには専用スキルが必要

・猫耳はかわいい

といった感じ。

「いわゆる『迷宮』だな」

「うん。ランダムマップじゃないってことは、レベル上げとマップングしながら徐々に攻略するタイプだね」

「『魔方阵』を壊せば終わりってのがちょっと変わってるな」

「あまり聞かないね。あ、しまったな。染み出しの件、聞くの忘れてた」

「あー。まあとにかく毎日潜ってれば大丈夫なんじゃね？」

「そうだね。うーん。やっぱりこの世界の迷宮はどちらかというところ邪魔な存在なんだろうね。ドロップ品は魅力だけど、それだけならこの世界何処にでもモンスターがいるわけだし」

「土地にモンスターを増加させるだけの天邪鬼ってことだな」

「あの」

「やっぱり攻略には時間が掛かりそうだね。一日一階層を目標にしても、ひと月近くかかりそう」

「まあ慌てて攻略しても危険だからな。安全マージンはしっかり取りながら……」

「すいません」

「ん？」

気がつくとも目の前に人が立っていた。話に夢中で全然気がつかなかったな。とりあえず応対はタクヤ任せにしとくか。

「はい。なんででしょう？」

「見たところあなた方はあまり迷宮に詳しくないようですね。宜しかったら説明しましょうか」

「あなたは迷宮ギルドの方ですか？」

「いえ、違います。わたくし、ディオーンと申します。各地を旅している、そうですね、語り部といったところですよ」

語り部とは各地の民話や伝説を集めて伝承する職業だったはず。要するに歌わない吟遊詩人だな。

「その語り部がなぜ迷宮のことを？」

「わたくし、知識だけは誰にも負けない自負があります。迷宮についてもそこらのギルド員なんかより詳しいはずですよ。よろしかったら知恵を買ってもらおうかと思ひまして」

「なるほど。それは素晴らしい」

タクヤは渡りに船といった様子で、嬉々として質問を始める。

俺は、横で話しを聞きながらディオーンというその男の様子を観察していた。

怪しい。俺の第一印象はそれだ。ぼさぼさの白髪にヒゲまで白い。背は高くなく、まとった外套は薄汚れており、身なりはあまりよくなさそうだ。ぱつと見、白髪のせいで、初老の男に見えたが、よく見るとかなり若いようにも見える。30代か？

おそらく、目的は路銀を集める事と、何か面白い話が聞ければ、といった所だろう。この世界では余り見かけない黒髪黒目の少年二人組が、田舎者まるだしで質問しまくっているのを見て興味を持った。確かに、スジは通っているような気もするが……。

なんか都合が良すぎる気がする。それはこの世界に来てからずっと感じていることだ。

みんなはこの異様な世界、少なくとも現実ではないこの世界にすぐになれてしまった。

人間の適応力とは素晴らしいと思うが、その一方でこの世界の異常性を忘れてしまうのは危険だと思う。

なぜクラス全員まとめてこの世界に飛ばされたのか。

異世界なのかゲームなのか。

HPが無くなれば死ぬのか。

そして、現実に戻るのか戻れないのか。

疑問はいくらでも沸いてくる。その疑問を少なくとも俺だけでも、忘れないようにしないとイケないな。

「クー」

「ん……」

「クーもディオオンさんに聞いておくこと無い？」

「ああ。わるい。えーと。ディオオンさん。この街にしばらく居るの？」

「いえ。明日にはウルドの街に行こうと思っております」

「ウルド……」

最初の街だ。ってことはたぶん……

「そうです。割と新しい街なのですが、その街に突然、奇妙な騎士団が現れたという噂があったので、ちょっと興味がわきまして。ですが、すぐに戻って来ると思っていますよ」

「ですよー。やっぱり噂になってたか。」

タクヤが礼と共に、報酬として銀貨を何枚か渡し、また後日会う約束をしてディオオンと別れた。

「ラッキーだったね」

「まあな。それで、何の話をしてたんだ？」

「聞いてなかったのか!？」

「ちよつとボーとしてた」

まとめると、

- ・ 最奥にある魔方阵はモンスターを生むために存在。
- ・ 先に迷宮内のモンスターから生まれるので、普通に探索していれば、周辺での染み出しは止まる。
- ・ 迷宮が発生する理由は色々な説があつてよくわかっていない。
- ・ ボス、魔方阵の守護者はちゃんと居るとの事。

といった感じ。

「迷宮については大体わかったな」

「うん。しっかり準備と整えていかないよ」

「ああ」

「そろそろ集合場所行こうか。たぶんみんな待ってるよ」

俺たちは集合場所にしていた酒場に向かって歩き出した。

7 ホーム

7

「やっと着いたー」

安堵の声と共に、荷物をほっぼりだして座り込むさあき。明け方にスクルドの街から王都方面の街道に出発し、途中に道を分かれ、木立に囲まれた道をひたすら歩き、目的地の迷宮とその側にある小屋を見つけたときにはすでに日が傾き始めていた。

「まだへこたれるのは早いよ。日が落ちる前に急いで今晚の準備を整えないと」

タクヤがみんなに声をかける。実際思ったより時間が掛かった。迷宮に近づくにつれて、どんどん遭遇するモンスターが増えてきたのが原因だ。染み出しというやつだろう。幸いそれほど強く無いモンスターばかりだったので、そこまで危険はなかったのだが、いちいち荷物を置いて戦わざるをえず、一戦一戦にずいぶん時間が掛かってしまのだ。

用意された小屋は、思ったより大きく、数十人は暮らせるように作られたものだった。木造の二階建てで、一階は暖炉つきの大広間とキッチンがある。二階には粗末なベットがならんだ大部屋が二つと個室が二部屋。現代人の感覚から言わせてもらうとこれは小屋ではない。一軒家以上の大きさだ。

これからしばらくここをホームにして、迷宮に挑むことになる。

女子陣が異常なテンションで小屋、改めホームを探索し始める。さつそく家具が気に入らないやら日当たりのいい方の大部屋を女子部屋にすることを強制的に決定するやら、てんやわんやの大騒ぎを始めやがった。

「はしゃぐな。まだやることがあるって言うてんだろ。タクヤ、早く指示出せって」

「それじゃあ、フーはとりあえず今日の分だけでいいから薪を集めて。クーとさあきは周辺の探索。モンスターを無理をしない程度に掃除しといて。仁保姫と六道は荷物を開けると掃除をお願い」

「え！？私、探索なの？」

「うん。モンスターの位置がわかるのはさあきしかいないんだから頼むよ」

「ええー……」

「ほれ。さつさといくぞ」

「いたい！髪、引つ張らないでよ！わかった。わかったってばー！」

「俺もいつてくるわー。乾燥してそんな枝を拾ってくれば良いんだろ？」

「うん。その暖炉にくべる様のやつね」

「うーい。タクヤは？」

「僕はちよつと迷宮の様子を確認してくるよ。ギルドでもらった旗も立ててこないといけないし」

「いつてらっしいー」

仁保姫と六道に見送られてホームを出発した。周辺は起伏のある林になっており、あまり見通しがよくない。耳を澄ますとさらさらと水音が聞こえるので、その音の方向に向かって歩くと、すぐ小川に

到着した。

「水場確保つと。おい、いつまで落ち込んでんだよ」

「うー。やっと到着したと思ったのにー」

「うるせえ。モンスター掃除しとかないとホームが襲われるかもしれないだろうが。夜中、寝てる時に襲われてもいいのか？」

「それはイヤだなあ……」

「そうゆうこと。さつさと終わらせないと本当に日が暮れるぞ。ほれ、さつさと位置を教えろ」

「はいはい。えーと。一番近いのはこっちね。バーゲストが3匹」

「よし、いくぞ」

さあきの能力『解析』。さまざまな情報が得られる能力。余りに色々な事が出来るため、いまだにさあき自身も把握し切れていないようだ。わかっている事は、モンスターや他人のステータスやレベルの把握、周辺にいるモンスターの名前と数と位置の情報を得たり、特殊な効果のあるアイテムの鑑定などができるとの事。現状最も使える能力だろう。

木立を分け入ってさあきの示した方向に向かうと、直ぐにイノシシ型のモンスター三匹に出会った。これがバーゲストだろう。体長2mといったところか。けっこーでかい。

「レベルは5。ステはV E I T特化20、急所は眉間だよ」

「おけ。一匹ずつやるぞ」

現在のLvは俺が8でさあきが7である。事前に決めてある敵ステータスの報告を受けて、楽勝と判断。一匹に落ちてた石を食らわせて、注意をこちらに向けさせる。こちらに気がついたバーゲストの突進を引き付けてかわすと、すれ違いざまに顔に短剣を食らわせた。

鳴き声と共に突進が止まる。その瞬間にさあきは横から金属製のメイスを脳天に向かって振り下ろし、衝撃によりバーゲストが倒れこむと、あとは二人でボコボコにしてHPバーを削りきっておしまい。

この騒ぎで他の二匹のバーゲストもこちらに気がついて突進してきたのだが、なぜか狙いは二匹ともさあきだった。

「うわあああああ！！？」

巨大なイノシシ×2に迫られて軽く混乱状態に陥ったさあきが突進を避けきれずに吹っ飛ばされて地面をごろごろと転がっていった。

「おい。なにやってんだ。大丈夫か」

「いったーい！！もー怒った！！」

派手に吹っ飛ばされたようだが、HPは2割ほどしか減っていない。大丈夫だろう。

起き上がったさあきはバーゲストに突進すると、大きく振りかぶったメイスを横腹にぶち込んだ。バーゲストの巨体は低い音と共に数十メートルは吹っ飛んで、木々を何本か折りながら転がっていく。うーん、昔から怒らせると相当怖い奴だったが、ばか力はこの世界でも健在なのか？STRはそんなに高くないと思うんだが。

素早く吹き飛んだ一体に追撃を加えて消去。最後に仲間が吹っ飛ばされて呆然としていた一匹を二人でふるぼっこにして戦闘終了。戦利品を回収している間、さあきは汚れてしまった服を払いながら自身の格好を確認していた。

「よく見たら私の格好、いろんなところがボロボロじゃん。せっか

「昨日買ったばかりのポレロだったのに……」

「ひどい格好だな」

「うるさいうるさいー」

「はいはい。次は？」

「えっと。後ろ」

「後ろ？」

振り向くと5匹のバーゲストの群れがこちらに向かって今まさに突進を繰り返すところだった。素早くさあきを掴むと、一目散に逃げ出した。不意打ちで5匹は面倒すぎる。

「気が付くのがおせーよ！」

「だってだって！」

走る速度はさあきよりも俺の方が圧倒的に速い。AGIが倍近く違う上にスキル『ダッシュ』も駆使すれば突進してくるバーゲストをも軽々と置き去りに出来るはずだ。しかし、さあきは引っ張っているこの状態では、逃げ切るのは難しそうである。

「はっ、はっ、はいー」

「おい。この先にモンスターいるか確認しろ」

「え、え、えーと。いないよー。」

「よし。そんじゃお前ちよっとまっすぐ走ってる。いいか。全力で逃げろよ」

「はっ？」

そういつて俺はさあきから手を放し、大きくジャンプして、立ち並ぶ木々の枝に飛び乗った。文字通り猪突猛進するバーゲスト達は、そのままさあきを追ってドコドコと走っていく。

「ちよつとー！逃げないでよー！」

必死な悲鳴が聞こえるがとりあえず無視で。よし。もういいか。

素早く枝から降りると、スキル『ダッシュ』を活用して全速力で前方の一団を追いかける。すぐにバーゲストの一体に追いつくと、視界に入らないように眉間に短剣を掠らせてやる。ほとんど触っただけに等しいその攻撃で、バーゲストは一瞬で消滅した。

スキル『死』のパッシブスキル『一撃死』。三つの条件、すなわち

1 短剣での直接攻撃

2 急所に当たる

3 対象が攻撃を認識していない

を満たしていれば一撃でモンスターを倒せる。この中でもっとも重要なのは3の『対象が攻撃を認識していない』という条件だ。今回は猪型という単純なモンスターだったので、ちよつと視界から消えればすぐに俺のことを忘れてくれるだろう、という読みだったのだが、どうやら当たったらしい。残りも一匹一匹、同じように処理をしていく。

最後の一匹となったところで、ついにさあきが追いつかれていた。前方をごろごろと転がっている。まあHPゲージはまだまだ残っているみたいだから大丈夫だろ。

最後の一匹が倒れこんださあきに更なる追撃を加えようと方向転換をする。止まったその瞬間を見計らって一気に近づき眉間に一撃を加えて、一撃死により即死させた。戦闘終了。

「おーい。大丈夫か」

「……信じられない。見捨てるなんて」

「失礼なことを言うな。囿に使ったただけだ」

「そっちのほうかひどいでしょ！」

「まあまあ。ほら、いい景色だぜ。見てみるよ」

いつの間にかかなり遠くまで来てしまったようだ。俺たちは林を抜けて、丘陵地帯にまでたどり着いていた。並んだ丘の上からはスクルドの街に続く草原や木立の中のホーム、遠くには鉾山地帯があるのであろう山脈が良く見えた。

現実世界と同じ太陽と、地平線までつづく林と丘陵地帯。人工的なものがほとんど見えないこの景色は、生まれた時からビルに囲まれて育った俺にはひどく新鮮に見える。

突然、さあきが消え入るようにつぶやいた。

「……私達、遠くに来たんだね」

「いまさらだな」

「ううん。なんか、クラスのみんなが一緒だったから全然現実感がなかったんだけど、こつゆう景色を見ちゃうと……」

一回り小さな体を震わせながら、泣きそうな顔。こいつとは物心が付いた時から一緒に居るが、ここまでへこんでいるのは久しぶりだな。

「私達、もう家には帰れないのかな」

「大丈夫。みんなもいるし、王子も絶対みんなで現実世界に帰るっていった。なんとかなる」

「……本当？」

赤くなりながら涙目で上目使い。あーこれは効くな。反則だ。くし

やくしやとその小さな頭を撫でる。昔、本当にガキのころだが、何かの拍子に大泣きを始めたこいつをこうして慰めた記憶がフラッシュバックする。昔と変わってないなこいつ。

「本当だ。約束する。だから泣くな」

「うん」

「んじゃ。探索を続けるぞ」

俺がそういつて歩き出すと、慌てて後ろを追って来た。後ろでこそごとと涙をぬぐう音が聞こえる。からかってやってもいいんだが、まあやめといてやるか。すぐにいつもの様子に戻るだろう。

8 迷宮

8

次の日。迷宮の前にパーティ6人が集まっていた。それぞれが武器防具を身に付け、さらにスクルドの街で補給した照明用の松明（先端に火術の魔石が取り付けられている簡単な物）、マップング用にまつさらな紙なども用意して初の迷宮探索に備えている。

今のみなの様子は大きく二つに分かれていた。すこし緊張した様子のフー、さあき、仁保姫ら一般人組。そして、高揚が隠し切れないタクヤ、俺、六道のゲーマー組だ。

本人は隠しているようだが、六道がゲーム通であることは、色々な場面から丸わかりである。妙にアイテムや専門用語について詳しいし、システムの理解も早い。なにより、6人の中で最も楽しそうに戦闘をこなす。その様子は、ゲームの世界の中に入るといふ夢が叶った少年のそれだ。普段は無表情な奴なんだがな。

「よし。それじゃあ入ろう」

タクヤを先頭に階段を下りる。降りた先は小部屋になっており、正面と左右には薄暗い廊下が伸びていた。とりあえずこの部屋にはモンスターは居ないようである。

「さあき。モンスターの情報わかる？」

「ちよつとまって……うわ。たくさん居る。ゾンビ・スケルトン・バット・マンイーター……」

「レベル帯は？」

「んー……9から12つて所かなあ。見た感じそのくらい」

「おっけ。それじゃ最初は慎重に進むよ。まずは迷宮に慣れること、そして一階層のマップピングに全力を傾けよう」

「マップピングって？」

さあきが首を傾げる。

「マップピングってのは迷宮の地図をつくることだよ。それがないと攻略どころか迷宮から出られなくなっちゃう」

「地図？でもそれってすぐにわかるよ」

「なんでだよ」

「だって……」

だって地図っていつも見えてるもん。

さあきはそう言い放った。どうやらこいつには常にモンスターレーダ付きの周辺地図が見えているらしい。しかもその範囲は拡大縮小可能で、半径1kmくらいは表示できるとの事。たしかにモンスターの居場所はわかるって聞いてたが、地図まで表示されてたのかよ。

馬の尻尾のようにフリフリさせているポニーテールを引っ張りあげてぶら下げてやる。

「そうゆうことは早く言え」

「いたいたい！だって聞かなかったじゃない！」

「もしかして、前言っていた建物の情報がわかるってのも、宿屋とか武器屋とかの種類が分かるって意味じゃなくて、構造まで分かるって意味なの？」

タクヤが質問する。最初、二人でさあきの『解析』スキルを検証し

た時に、建物の説明が出ると言う話は聞いていた。しかし、あれは武器屋だとか、あれは雑貨屋だとか言うので、店の種類を判断できる程度に考えていたのだ。

「構造っていうか、うーん。いっぱい有りすぎてうまく説明できないんだよねー」

「わかった。じゃあこの迷宮に対して見えている情報を全部残さず言え。省略するなよ」

「えー。全部言うの？えーと『ユグドラシル大陸・ノルン王国・スクルド北東丘陵地帯・アスモデウスの迷宮・階層1』。次に『アスモデウスの迷宮・全21階層・出現モンスターレベル「9-32」』で書いてあって、その下に地図があって、地図上にモンスターっぽい赤い点と良くわかんない緑の点と、私達っぽい青い点があって、右上に『アスモデウスの迷宮・地下1階』って書いてある。あ、あと赤い点に触ればそのモンスターの情報がポップアップされて出てきて……」

『解析』スキル、チートすぎワロタ

「予定変更。さあきはすぐにマップを描く作業を初めて。とりあえずは地図だけでいいや」

「ん。わかったー」

「描き終わるまでは、キャンプ狩りにしよう。適当にモンスターをプルしてくる。フーと六道、ついてきて。クーたちはバフをかけて準備しといて」

「おっけー」

タクヤが、フーと六道を連れて通路に消える。残された仁保姫がすこしおろおろとしていたので、一応説明しておいた。

キャンプ狩りというのは戦う場所を決め、モンスターをその地点に誘導して戦闘を行うこと。プルってのは釣りとも言われてて、仲間の場所までモンスターを誘導してくること。バフっての強化スキルや強化魔術のことで、それをかけて戦闘に備えろってこと。

「あ、なるほど。わかりました！」

慣れない様子でバフを掛けて行く仁保姫。俺も薄い空気の膜を張る『風術』『ウィンドレイヤー』や自然回復力を底上げする『水術』『リジエネレーション』を使用する。まあこれぐらいしかないわけだが。

隣の仁保姫はそれら基本魔術に加え、派手なエフェクトの自己バフを使用していた。

仁保姫の固有スキル『天賦の才・格闘』は基本的に俺がもっている『短剣』スキルなどと同じ、武器スキルのようなものである。武器スキルは上がることにはさまざまな技を習得する。例えば俺の『短剣』スキルで現在使えるのは『三段突き』と『スローイングナイフ』の二つ。どちらも通常攻撃に毛が生えた程度の技だ。

しかし、仁保姫の固有スキル『天賦の才・格闘』は異常である。自然回復力が大幅に上がる『克己』に次の一撃の攻撃力を大幅に上げる『気合』。通常攻撃の2・3倍のダメージを叩き出す『飛び蹴り』に拳句の果てには『気弾』なる遠距離技まである。

同じスキルレベル5でこの違いだ。元々の格闘技術と前衛向きのステータスに加えて、このスキル性能の違いである。はつきり言ってみてもに戦って勝てる気がしない。まだこの世界のシステムに慣れ

ないようで、魔術やスキル関係がぎこちないのが弱点ではあるが、それはゲーム歴0時間なので仕方ない事だろう。

「そういえば、タクヤとはすこしは仲良くなったのか？」

ビクツつと体を震わせる仁保姫。みると顔が赤くなっていく。あれ？なんか変な事言った？

「な……なんで知ってるんですか？」

なんてと言われても。最初っから丸わかりだったろーが。バレてないと思っていたのか。

「いや。なんとなく…ね」

「うう……」

「ああ見えてタクヤって押しに弱いところがあるから、ガンガン行った方がいいぞ」

「そうそう。私も前から言ってるんだけどねー」

「さ、さあきちゃんまで……。私だつてがんばってるんですよ」

「あ、来たぞ」

「え、ええ!?!」

ガチャガチャと金属製のブーツの音を鳴らしながら、三人が走りこんできた。その後ろには、骨モンスター×5が戦闘体制で追走している。目に青い光を宿し、ボロボロながらも武装したスケルトン。定番といえば定番のモンスターだが、この世界に来て始めて見たな。

「仁保姫!」

「は、はい!」

仁保姫がタクヤの声に反応して返事をして、敵集団に向かって勢い良く飛び出した。そして、すでに三人のファーストアタックによりHPを減らしていた敵スケルトン一体に飛び蹴りを放った。

ガシヤンの気持ちのいい音と共に、スケルトンの頭蓋骨が吹っ飛ぶ。続けて回し蹴りの後、体勢を整えてからの正拳突き。流れるような連続技により、スケルトンは無惨にもグシャグシャな白い何かに変わっていた。瞬殺。いやだいやだ。怖すぎる。

俺はスケルトンの敵意を引き付けるため、一体に『風術』『ウインドカッター』を唱えた。カマイタチがスケルトンのHPを削る。攻撃を食らったその骨は方向転換をしてこちらに向かって来た。残ったスケルトンも、それぞれフー、六道、そして仁保姫が自身に引き付ける。ここからは一対一×4だ。

オンラインRPGの世界ではPTで盾役・タンクなどといわれる役割を持たせることがよくある。これは、敵の攻撃を一身に集めて仲間を守る役割だ。防御力が高くてHPも高いタフな奴が攻撃を受けたほうが安全で効率がいい。という考え方である。

この世界でも最初はその方式でいけるかどうか試してみたのだが、どうもうまくいかなかった。いくつかの要因が考えられたが、最大の原因は手軽にヘイト（敵の注意）を稼ぐ手段が無いことである。この世界の戦闘では、敵の攻撃を一人に固定することが難しいのである。

結局、盾役システムが有効に働くための最も重要なファクターは堅固な防御力でも、膨大なHPでもなく、強力なターゲット固定能力なのだ。その要素を持つメンバーが居ないこのPTでは、それぞれが一対一をしたほうが効率が良い。それが今までの戦闘から分かっ

たことである。

大きく振りかぶったハンドアックスからの攻撃避け、カウンターに短剣の柄で殴りつける。今の一撃でHPバーをすべて削りきったよ
うで、スケルトンは突然骨くずへと戻り、消滅して魔石となった。
切るべき場所がスカスカのスケルトン相手は、おれの短剣とは相性
が悪かったが、なんとか倒せたようだ。

8 迷宮（後書き）

『風術』 / 『ウインドレイヤー』

HP消費小。術者の周囲に気流の流れを作り出し、攻撃を避けやすくする。効力は『風術』スキルに依存

『水術』 / 『リジェネレーション』

HP消費小。自己回復力を高める。効力は『水術』スキルに依存

9 探索

9

一階層でキャンプ狩りをしていると、三十分ほどでさあきが地図の作成を終えた。その後は、探索を後回しにして最短距離で次の階層にすすんだ。そして次の階層でも、さあきがマップピングをしている間に階段部屋でキャンプ狩りをし、地図を描き終わるとすぐに次の階層に進むという作業を続けた。

タクヤが説明するには、このようなやり方で進む狙いは二つだそう。一つは敵の特性や配置を確認するため、そしてもう一つは自分達の限界を把握したいから。

俺たちは、さあきの能力で敵のレベルやステータス、さらに弱点までも確認できる。これは圧倒的なアドバンテージである。攻略本を片手にプレイしているようなものだから。しかし、もちろん完璧ではない。例えば行動パターンや特殊攻撃、さらに危険な敵の組み合わせなど、実際に確認してみなければわからない情報はいくらでも存在する事を忘れてはいけない。

そして、もちろん戦闘経験は戦いでしか磨かれない。できるだけ多くの種類のモンスターと戦闘して、レベルと共に戦闘・連携技術を身に付けたいといくらチートスキルを持っていても宝の持ち腐れである。

もう一つの狙いについては、今後の戦闘においての安全マージンを計るために、『大体どこまでのレベル差の敵が相手なら戦えるのか』ということを確認しておきたいという事。しかし、この狙いは空振

りに終わった。

アスモデウスの迷宮・地下5階・階段広場

俺は人型の狼・ワーウルフと対峙していた。全身を覆うダークブルーの毛。鋭く長い牙に研ぎ澄まされた爪。酷く曲がった背中のせいで、子供くらいの大きさにも見えるが、実際の大きさは俺と対して違いはないだろう。

人狼は一瞬のタメの後、鋭い牙を向けながら飛びかかってきた。見た目を裏切らず、俊敏な動きである。それでも避けられないことはない。AGI特化なめんな。

「よつと。『三段突き』」

紙一重でワーウルフの牙を避けると、すぐに反撃を加える。一、二、三発と、連続して繰り出された突きがワーウルフの体に風穴を開ける。血が噴出し、HPバーを大きく減少させた。あと3割つてところか。

「『ファイアランス』行くよ。みんな離れて！」

タクヤの号令に、それぞれが対峙していたモンスターから距離をとる。直後、タクヤの手から巨大な炎柱が噴き出した。それは見事にモンスター全体を巻き込みながら進み、俺の相手はもちろん、他の三人が対峙していた敵すらも葬り去る。後衛、タクヤの狙いすました範囲魔術が炸裂した。

このPTのリーダー、タクヤは完璧な魔術師プレイに徹している。各種基本魔術を、そのダントツに高いINTと適確すぎるタイムイングで行使する事によって、効率的に大ダメージを叩き出す。今の『ファイアランス』だって、本来はただの一直線上に敵を薙ぎ払うだけの範囲魔術なのに、なぜか全体魔術となってしまうた。さすがにMMO歴 年齢の廃人様は違うね。

「おっしあ！楽勝だな」

「この階層も大丈夫そうだね」

フーの威勢の良い声にタクヤが答える。いまの敵はワーウルフレベル16・4体とヘルハウンドレベル15・2体の組み合わせだった。対する俺たちは最高で俺のレベル11。にもかかわらず、問題なく倒せてしまった。しかも一人抜きさきの5人で。

これは敵がレベル差5のグループでもまだ余力があることがわかったと同時に、戦える敵の上限がまだまだ見えないことも意味する。

「思ったより全然行けるな。もうちょっと苦戦するかと思ったが」

「みんな強いですねー」

「紅亜礼が一番強い」

「えっ！あやねちゃんの方がすごいよー」

賞賛し合う仁保姫と六道。お気楽だよなこいつらは。だが、この二人は俺がワーウルフー一体と対峙している間に、それぞれ2体ずつを相手にしていた。このPT、女子陣の近接戦闘の強さには、正直男として思うところがあるよな。

「できたー」

「あ、さあきちゃんお疲れ様ー」

一人、階段に座り込んで黙々と地図を描いていたさあきが、仕事を終えて大きく伸びをした。それを見てタクヤが腕時計（現実世界から付けていた物）を確認してみんなに指示を出す。

「そろそろ迷宮に入って大体6時間くらい経ってるし、今日はここまでにしようか」

「ん。まだまだいけると思うが」

「うん。まあ特に慌てて降りる必要も無いし。それに次の階って6階だろ。ちよつと怪しいんだよ」

「怪しいって？」

「えっと、確認なんだけどさあき、この迷宮って全21階層なんだよね？」

「えっ？うん。ウィンドウにはそう書いてあるけど、それがどうしたの？」

ああ。なるほどね。大体言いたい事はわかった。

「大体こーゆーRPGのダンジョンってボス、ちよつと強めの敵の事ね、がいるんだよ。で、いるとしたらキリがいい階層。今回の21階層なら、5階刻みの『6階、11階、16階、21階』か10刻みの『11階、21階』が怪しい気がする。まあただの経験則だけど。本当は5の倍数階も怪しかったんだけど、何もなかったからねえ」

「へえー」

まあ実際はあんまし関係は無いだろうけど。タクヤがそう判断するなら従うまでだ。

出来れば『ギリギリ勝てるレベル差』を確認したかったが、まあし

ようがないか。どちらにせよ一日で全階層の4分の1も進んでしまったんだ。あまり進み過ぎても、色々な意味で危険なのは確かだろう。

俺たちは来た道を戻り、地上へと向かった。敵モンスターはきつちり再配置リポップしていて、再び、今度はさあきを含めた6人での乱戦を繰り返しながら進んだ。

ホームに戻ったときには既に日が暮れていた。うちのPT、料理担当のさあきと仁保姫が慌てて食事の準備を始める。今日の料理は昨日拾ったバーゲストの肉を使ったステーキがメインだそうだ。

その間残りのメンバーは戦利品の整理。一番の目的である魔石180個ほどが集まった。エギルとの契約だと、これで銀貨180枚だ。その他大量の毛皮やスケルトン達の武装なども合わせればおそらく銀貨200枚、つまり金貨2枚ほどになるだろう。初日としては悪くない。これからモンスターを狩ることに集中すればこの倍はいけるだろう。

今日はマッピングと迷宮に慣れる事、そして安全マージンの確認が目的であった。実際、全員なら敵レベルが自分達より+5ほどあっても余裕であり、2、3人の少人数でも敵レベルが同じくらいなら問題ない事がわかったのは大きい。

タクヤはこれらのことを踏まえ、晩飯兼反省会の席でみなにこれらの迷宮探索について以下のルールを示した。

- ・マッピングが済んでない階層（現状だと5階以降）に行くのは禁止
- ・マッピングが済んでいる階層でも、出てくる敵のレベルは自分と同じくらいの階層で戦闘する事
- ・マッピングの済んでいない新しい階層へ行く時は全員で行く。
- ・ソロ行動は基本的に禁止。最低でもペアで行動する事

などである。要約すると、『危険の少ない場所で同格以下を乱獲しろ』

同格以下を乱獲するメリットは当然魔石だ。魔石を落とすのはどのモンスターでも同じだから乱獲のほうが儲かる。一方、レベル上げの面で見ると、おそらく格上と戦ったほうがレベル・スキル上昇は速いとは思われる。検証したわけではないので不明確だが。

また、同格以下、ソロ禁止などルールは安全の為だそうだ。特にソロ禁止については、俺は反対したのだが押し切られてしまった。うーん。パーティ戦だとなかなか固有スキル『死』を使う機会がないんだよね。どうやって鍛えていくか、考えないとな。

「レベル上げは各自でやろう。基本的にいつでも迷宮に入ってもいいけど、今言ったルールは守ってね。それと食事はさあき達がやる気満々だけど、家事や掃除は分担してやるからそっちなもサボらないように」

「ご飯は任せてー、ねっクアラ」

「う、うん……」

さあきは昔から料理好きだったからな。腕前も文句無しである。マトモな素材さえ用意すれば食事には全く困らないだろう。まったく便利な奴だ。

9 探索（後書き）

『短剣』 / 『三段突き』

高速で三回突ける。狙いはつけ難い。

『短剣』 / 『スロージングナイフ』

ナイフを投げつける。10m程度なら狙いに寸分無く当たる。『一撃死』は発動しない。

『火術』 / 『ファイアランス』

HP消費中。術者直線上に炎の柱を出現させる。大きさは『火術』スキルに依存。

10

小部屋へ続く通路。現在俺、六道、フーの三人で迷宮に潜っている。さあきによって作成されたマップによると、この先の小部屋は行き止まりになっているが、『緑の点があったお ミ』と書き込みがある。若干、書き込みにイラツとしたが、どうやら緑の点は宝箱を表しているらしい。部屋を中心にそれらしき物体が見える。同時に敵モンスター、今回はスケルトン達もワラワラというわけだが。

「フー、頼むわー」

「おっけー」

フーは道具袋から棍棒を取り出すと、数十メートル先の小部屋にいるスケルトンに向けてそれを投げつけた。ほぼ直線軌道で進んだ棍棒は、スケルトンの頭蓋骨を粉々に粉碎し、同時にHPを大きく減らした。

フーの能力の一つ『スロー』。フーが投げられると思ったものはなんでも投げられる能力らしいが、重要なのはどちらかというと、『投げる威力』がハンパないという点である。こいつは投げられるものは何でも強力な遠隔攻撃になってしまうのだ。

「くるぞ。アーチャ2とウォーリアー4だ。フー、アーチャを狙え」

よしてきた、とフーが道具袋から手当たり次第に物を投げる。拾った敵の武器、モンスターの牙や爪、拳句に道中に落ちていた礫石など、本当に節操が無い。それでも、襲い掛かるスケルトンの群れの後方、

スケルトンアーチャのHPをゴリゴリと削っていき、そいつらが攻撃態勢に入る前に、倒してしまった。まったくデタラメである。

「いくぞ」

「うん」

『闇術』 『シャドー』

氷のような冷たさで詠唱された六道の魔術。六道の影が怪しく形を変えると、迫り来るスケルトン×4の影に入り込み、動きを縛ってしまった。初めて見た闇術だったが、どうやら行動禁止の術らしい。それなら、と素早く『ダツシュ』を発動し、すれ違いざま一体に、急所である脊椎に一撃を加えて走り抜ける。スケルトンウォーリアーが淡い光と共に消滅する。

スケルトンに対しては、なぜか急所を突けば『一撃死』がいつでも発動する。これには最初驚いた。原因は不明だが、スケルトンは死んでから攻撃を認識するってこと自体ができないんじゃないの？ というのは六道の意見。そう言われればそうかもしれないが……。でもまあ使えるものは使おう。

返す刀でもう一体の急所も抉り、残り二体。

「どいて」

仰ぎ見ると六道がその巨大なバスタードソードを大きく振りかぶっていた。そしてゆっくりとしたモーシヨンから、通路の横幅いっぱいに届きそうななぎ払いを繰り返した。慌ててバックステップして攻撃範囲から脱出する。しかし、動きを止められた残りのスケルトンは為す術なくその巨大な斬撃の餌食となった。

六道により、大きくHPバーを削られたスケルトンに三人でトドメをさして戦闘終了。

「なんだ六道。その魔術いつの間に覚えたんだ？」

「別に、前から使ってた」

「ふーん」

六道は俺らの中でも群を抜いて戦闘に強い。あの仁保姫と並んで前衛をしているのだからそーとーだ。そう、たしかに強い。だが、ステータスも持ちスキルも近接戦闘向きの仁保姫と比べて、どこが強いのが良くわからない。

固有スキルの『闇術』も現状、妨害用の魔術ぐらいしかないはずなんだが。おそらく、立ち回りや魔術の使い所なのだろうが、とにかく不思議な強さだ。

「おーい。はやく開けようぜ」

「ん。ああ」

「……」

すばやく宝箱部屋に入り込んでいたフーが急かす。宝箱を安全に開ける『開錠』スキルを使用して、宝箱を開けた。

中身は古いコインや宝石、そして大き目の魔石だった。高く売れそうだ。

「よっしゃー。次、行こうぜ」

「はやく」

まだまだやる気満々の二人。

フーにはは大きなモチベーションがある。ハーレムだ。どれくらい資金が必要なかは教えてくれなかったが、とにかくまとまった金が入るまでは俺たちとここで稼ぐつもりらしい。そーとー張り切っている事がわかる。

一方、六道はたぶん楽しいんだろうな。戦闘が。迷宮が。そしてこの世界が。おそらくこのPTで一番この異世界トリップを楽しんでいるのはこいつだ。最初一緒に行動することになったときはどうなることかと思つたが、意外に気が合う奴でよかった。

なんとなくそんなことを考えながら、先を進む二人の背を追いかけて歩きだした。

夜明け前。この世界でも夜には月が巡り、朝になれば太陽が昇る。違いと言えば、信じられないほど綺麗な夜空だということぐらいか。ふと、星の位置からこの世界が現実なのかどうなのか判断できるかと考えた。だが星座についてほとんど知らない俺には、この夜空が現実世界のそれ同じかどうかの判断ができない事に気が付き、自嘲の笑みを浮かべるだけに終わった。

最初に迷宮にやってきた日から一週間ほどで、11階までのマッピングが終わり、7階層までの宝箱を回収した。レベルも最高で六道の19、最低でもさあきの16となっている。

一日目に5階層までのマッピングを済ましてしまった俺たちは、次の日から、それぞれマッピングの済んでいる階層での宝箱回収とレベル上げをメインに行っていた。ほぼ、一日一階層ペース攻略は進み、件の6階とか11階にボス居るんじゃないかね？というタクヤの心配も杞憂だった。まったく順調である。

「朝か……」

話は変わるが、俺はショートスリーパーと呼ばれる人種である。これは要するに普通の人より睡眠時間が少ない人のことだ。俺の元々の睡眠時間は3時間ほどである。明け方に寝て、それから朝8時頃に幼なじみのさあきに起こされて学校に登校するという生活を毎日続けていた。

現実世界では明け方までゲームをするのが日課だったので、利便な体質だな程度にしか考えていなかったが、この世界は一晩中起きておくには、あまりにもやる事が無い。

しょうがないので俺はホームの家からの二階から屋根に上り、人ひとりがぎりぎり立てるだけの屋根上で見張りついでにその場所で一晩中スキル上げをしていた。

俺は目を閉じて自身のステータスを確認する。

LV18

HP	421
STR	41
DEX	62
VIT	35
AGI	77
INT	31
CHR	56

スキル/死9 /短剣11 /ダツシュ7 /風術6 /水術6 /隠密14 /
眼力15 /開錠6 /聞き耳3 /覗き見4

『隠密』はアクティブスキル『ヒドウン』、『眼力』(これは視ることについてのスキル)に属するパッシブスキル『夜目』と『千里眼』があったため、『ヒドウン』をしながら夜景を眺めているだけでこの二つはどんどんあがった。しかし、手持ちスキルの中で、この場所でスキル上げが出来たのはこの二つだけだった。

死、短剣は戦闘でしかあがらないことは予想できていたのだが、魔術もあがらないのは予想外だ。バフをいくらかけてもあがらなかったのである。システムのにはおそらく重ね掛けしてもスキル上昇判定は行われないうことなのだろう。仕方無しに、『隠密』と『眼力』を上げることになったのである。

最後の二つ、『聞き耳』と『覗き見』は数合わせ、というかスキル上限数を計るために適当に覚えたものだ。そのおかげでスキル上限は10であることがわかつている。

別に『眼力』と『覗き見』スキルで何処からでも覗きたい放題じゃんとかおもってないですヨ。

下の階からガタガタと物音がした。早番の奴がそろそろ起き出したのだろ。するりと見張り台のある屋根からハシゴをつたって二階に降りる。ちょうど女子部屋から六道が出てきたところだった。

「おはよう」

「……おはよう」

「朝、早いんだな。まだ夜が明けきってないぞ」

「あなたこそ。本当に、毎日一晩中起きているのね」

「まーね。体質なんだよ」

感心したように目を見開く六道。意外にもこの体質、気付かれていなかったらしい。初日の迷宮探索後、どーせ明け方まで起きとくから、屋根に上つて一晩中見張りでもしとくという主旨の発言をしたら大層驚かれてしまった。そして今も興味深そうにジロジロと見つめられる。

別にめずらしいモンでもないだろ。くやしいのでこっちも視姦してやる。

寝起きにもかかわらず寝癖一つない漆黒のストレートヘヤー。白粉

を塗ったかのような白い肌。少しキツめだが大きく、くつきりとした目。寝巻き用のワンピースの上から伸びた長い手足。出るところは出ているがスレンダーなモデル体型。うーん。よく見ると恐ろしいほど美人だな。こいつ。

「……………なによ？」

「なんでも。……………ふああ。んじゃ、俺は一眠りしてくるわ。迷宮行く前に起こしてくれ」

「ん。わかった。おやすみなさい」

ガツ！

「んお！なんだ!？」

「起きろフー」

「ん。んおー？あ、ああ。朝か……………おは」

「もう六道は起きてたぞ」

「ん。わかった……………。まっつてて六道たんー」

「殺されるぞバーカ」

もう一人の朝番、フーを叩き起して、俺はベットに倒れ込んだ。ようやくやってきた眠気に身をゆだね、短い睡眠に入るとしよう。

10 日々(後書き)

『闇術』 / 『シャドー』

HP消費小。影を捉えて動きを縛る。使用中常にHPを消費し続けるが、その量は『闇術』スキル、敵レベル、対象数に依存する。

11 買出し

11

スクルドの街・商人ギルド。

迷宮探索開始から十日ほどが過ぎたある日。俺はスクルドの街を訪れていた。目的は食料や日用品の補給。そして、そのための換金である。

この世界には為替制度が存在する。とはいっても俺はそもそも為替制度自体、あまり詳しくない。タクヤが言うには要するに小切手のことらしい。取引を現金で行うのではなく、羊皮紙に金額を書き込んで受け渡し、その証書を商人ギルドやそれに準ずる場所に持つていけば換金できるという仕組み。ホームにやってくるエギルからの使いとは、この制度を用いて取引をしていた。

タクヤは興味深げにこの制度について色々と考察していたが、俺にはよくわからなかった。確かに便利な制度だが、この外を歩けば危険にぶち当たる世界で、現金を持ち歩くのはあほらしいから、そりゃあつてもおかしくないだろ。その程度の認識である。

とにかく、そうゆう制度があり、そして今、十日分の儲けの換金を終えたところだ。金貨38枚と銀貨342枚。どうせ細々とした買い物が多いので最初から銀貨を多めにもらっておいた。

さて、そろそろ追いついてきたかな。

俺は北門に足を向ける。本当は一人で来る予定だったのだが、フリーがどうしても付いてくるというので連れてきていた。が、まあ思ったとおり俺の高いAGI＋スキル『ダツシュ』による高速移動に、全くついて来れてなかったため、街に着いたら北門で待つてると言っつて、途中置き去りにしてきたのだ。

北門にはボロボロになった坊主頭のフリーがいた。

「はっ、はっ、うっ……」

「やっと来たか。意外と早かったな。もう換金は終わったぞ」

「はっ、はっ。有り、得ん。いくら、なんでも、速すぎるだろ」

俺はPTの中では圧倒的に移動速度が速い。それしか能がないとも言えるが。とにかくその能力を活かして俺は街への補給役を任せられた。(半分は『ダツシュ』のスキル上げがしたかっただけ)

実際、現実じゃ考えられない速度で走ってきた。初日、半日以上かかったホームレスクルド間を小一時間で踏破したのだから。しかしどちらかというとフルマラソン一本分の距離を休まずに走って、息を切らす程度だった事のほうが驚きである。つまり、持久力も上がっているということ。

AGIとDEX以外は俺とフリーのステータスは大して変わらないはずなので、この違いはまあAGIの違いと見てよいだろう。持久力はVITの領域だと思っていたので意外だった。おそらくAGIは運動性能全般を底上げしているということか。

そんなことを考えながらフリーが立ち直るのを待ち、換金した金貨を半分渡しながら今日の予定を確認する。

「俺は、装備関係の買出しとタクヤに言われた用事を済ましてくるから。お前は食料と日用品を頼むわ。それと馬車の件もよろしく。教会の隣に売ってる店があるから。たぶん金貨20枚くらいあれば買えると思う」

「わ、わかった」

「んじゃ正午にまたここでな」

そういつてフーと別れた。馬車は以前から優先的に購入しようとしていた物だ。迷宮探索は大量のドロップ品が手に入るわけだが、現状、俺たちはそれを運搬する手段を持っていない。そこでエギルとは買取の契約を結んでいるわけだが、当然買い叩かれる心配がある。そこで馬車を買おうという話。また、これから旅をするにしても馬車は持つておきたい。以前スクルドの街で価格を調べたときは馬一頭で金貨15枚ほどだった。現実世界なら150万円以上だ。それに荷馬車も合わせれば、さっき言った金貨20枚くらいになるだろうという計算。結構な値段だが、まあそれに見合う利用価値はあるだろう。

さて、とにかくその話はフーに任せよう。俺は俺で色々と用事がある。まずは冒険者ギルドで魔石の売却値段の確認からだ。急ぐか。さっさと廻らないと正午に間に合わなくなってしまう。

……

「それじゃ。この『魔石加工』スキルがあれば魔石に魔術をエンチヤント出来るわけ？」

「いや、それだけじゃダメだ。魔術にもランクがある。上位の魔術ほど高い『魔石加工』スキルと質のいい魔石が必要だ」

「ふーん。具体的にはどうなの？街の周りのモンスターから取れる魔石で『ウインドカッター』はエンチャント出来る？」

「無理だな。せめて『ウインドレイヤー』までだ。街周辺のモンスターの魔石は基本的には『属性』を入れて使う程度だ」

「なるほどねえ」

俺は魔導士ギルドで知り合った、エルフ耳の威勢のいい女魔術師に質問攻撃を仕掛けていた。今の話題は魔石加工について。ファンタジーの世界でエルフというものは慇懃無礼と相場は決まっているのだが、この世界ではそうでもないようだ。見た目は20代後半かそこらだが随分と気さくな女性で、俺のわりと細かい質問にも八キ八キと答えてくれる。

次に俺は現状到達地点で入手した魔石（敵レベル21）を渡してみた。

「この魔石ならどの位のモノがエンチャントができる？」

「ん。この魔石なら中級魔術はエンチャント出来るだろうぜ。もしかしたら上級もいけるかもな。なかなか質のいい魔石だ」

「どうやって判断するの？」

「ん？色と大きさで大体わかるよ。『鑑定』スキルがあればもっと正確にわかるはず」

『鑑定』スキルで解って『解析』スキルに解らないはずがない。さあきめ。まだ俺に知らせてない情報があったのか。あとで説教だな。

「なるほど、慣れってことね。ああ、そろそろ行かなきゃ。いやーありがとう。いろいろ教えてくれて」

「どういたしまして。私も君のような熱心な子に教えるのは楽しいよ。私はフレイヤ。誇り高き森の民だ。君は？この辺じゃ見かけない人種のようなが」

「俺はクーカイ。一応、人間だよ。出身地は行ってもわからないだろうからまあ果てしない田舎から来たと思ってくれ」

「はは。変わった子だ。また聞きたいことがあればここにくれればいい。仕事があれば暇しているから」

そうしてフレイヤと別れ、魔術ギルドを出た。なかなか気の合うネーチャンだった

俺とタクヤは現在、このエンチャントに最も興味をもっている。この世界において魔石は台所から戦争まで、様々なものに使われているのだが、魔石に魔術を詰める技術がこのエンチャントである。

理由のひとつはタクヤの『時術』と六道の『闇術』の存在だ。基本的にこの世界は火水風土の四種類の魔術しか扱われていない。他の魔術は有ることはあるがほとんど出回らないらしい。それぞれが秘術としているそうだ。

要するにめずらしい魔術を売り物にしてしまおうという魂胆である。

特殊な魔術はそれだけで戦力であり権力である。東の教国のトップのみが使用できる『神術』がその典型で、聞けば不治の病を治すやら、聞けば100万のモンスターを打ち破ったやら、信じられない話ばかり聞く。多少の尾ひれは付いているのかもしれないが、すくなくとも強力な魔術であることは間違いない。

そんな特殊な魔術を売り物にすれば、さうとう儲かるんじゃないかというのが俺たちの皮算用。今後、旅するにしても何するにしても

収入源を確保しておけば、確実に有利であろう。そのための第一歩としてスキル『魔石加工』を購入し、情報を収集していたというわけだ。

俺は魔術師ギルドを出た後、武器防具屋を廻り、各自の装備や補修用の布切れ、薬品やついでにさあきに頼まれていた調理器具や裁縫用の糸や布などなど。

気がつくとも正午を知らせる鐘の音が鳴り響いていた。帰りは荷物があるため、一人で突っ走って帰ればいいというわけにはいかない。正午には街を出発しないと、下手をすると日没までに帰れなくなってしまう。慌てて荷物をまとめ走り出した。

北門にたどり着くと、そこにはすでにフーが待っていた。

「わるい。ちよつと遅れた……あん？」

フーの横に、ボロボロの服装をした金髪の少女が二人、不安そうに佇んでいた。

12 奴隷

12

「説明してもらおうか」

「うっ……」

恫喝に黙り込むフリー。目が右へ左へ、トビウオのように泳いでいる。どう説明しようかとあれこれ思考をめぐらしているようだ。

二人の少女が互いを守るように抱き合っていた。いや、違うな、ショートカットがロングヘアを庇っているのか。ショート少女は威嚇するような目で、ロング少女は怯えるような目でそれぞれ俺とフリーのやり取りを窺っている。

「えっとな。この子達は奴隷市で売られてて……」

「そんなところだろうな。で、俺はなぜここで待っているのが馬車ではなく少女なのかを聞いているのだが」

「えーとっ……。話せば長くなるわけで……」

「は・な・せ」

しどろもどろに搾り出したフリーの言葉を、まとめるとだいたい次のような感じ。

二人は姉妹。ロングの方が姉のサラ、ショートの方が妹のエレン。フリーは初めてスクルドに来た時に奴隷市で二人に出会ったらしい。ほかの女奴隷と比べて事情があつて安く、テンションが上がっていたフリーがその日の内に買い取る約束をしまい、期限が迫ってい

たのでしようがなく馬車の代金で買って来たという話。

あー。やってしまったな。奴隷ハーレムを作ろうとしている奴に大金を持たせた俺が間違いだった。

「でいくらしたんだ？」

「……金貨20枚」

「まぢでか……」

そう吐き捨てて少女二人を見下ろす。ビクリと体を震えさせて、さらに強く互いを抱き合うサラとエレン。髪の毛の長さは異なるが、二人とも金髪に蒼色の瞳、そして白雪のような肌。ボロボロの服装に栄養の足りてなさそうな体つきだが、奴隷に落ちる前は貴族の家系だったらしい。よく似た姉妹だ。

年齢はサラは俺たちより少し下で、エレンは小学生高学年といったところだろう。二人ともまだまだガキっぽさが残っている。サラはまだしも、エレンについてはこんなガキを奴隷ハーレムの一員に選んだのかとこのハゲは……。いや、こいつの性癖などどうでもいい。問題はこれからどうするかだ。

フーがなにやら言い訳を並べているがとりあえず無視で。この世界にクーリングオフなんて制度があるとは思えないし、返品は効かないだろう。それよりもさっさとホームに帰らないと日が暮れてしまう。荷物も持って帰らないといけないし。

まあ奴隷の扱いはタクヤ達と相談して決めるか。よし。

「馬車以外の言われたものは買ってあるのか？」

「えっ！！あ、ああ。一応」

「おk。じゃあ荷物運び用の荷車、今すぐ買ってこい。ダツシユな」
そういつて金貨を一枚投げ渡す。慌ててそれを受け取ったフーが逃げ去るように買いに走っていった。

「さて」

二人とも相変わらず怯えている。まあ実際怒っているからしょうがないが。

「えーと。サラとエレンだけ？言葉は分かるか？」

「は、はい」

「うん」

「よし。フーの馬鹿が荷車を買ってきたら、荷物を載せるのを手伝ってくれ。すぐに俺たちの家に向かう。日が暮れるまでには着くと思うから」

「あ、あの」

「分かってる。歩けないだろ？」

「はい。申し訳ございません」

姉のサラは右足のヒザから下を戦争で失っていた。ボロボロのロングスカートからは左足一本しか見えない。手に持っている木の棒は松葉杖代わりだろう。

値段が安かったのはそれが理由だ。それもそうだと思う。当然ながら、誰が働けない奴隷など欲しがるのかという話。動けない奴隷の使い道など、ギリギリ愛玩動物としての価値しかないだろう。その点サラは器量がよく、性格も従順であったため、性奴隷としてギリギリ価値があったそうだ。

「姉さまも分も私が働く……働きます」

妹のエレンが舌足らずな敬語で主張する。こいつはまだどう見てもガキだ。フーの話だとサラと一緒に買って貰わないとイヤだと、手が付けられなくほど暴れていたらしい。事実、身体中に傷があるところから、かなり無茶をしていた事が窺える。

「ああ。二人とも、これからどうするかはホームに戻ってから決める。まあ悪いようにはしないが、金貨20枚分の働きはしてもらおうだろうから覚悟しといて」

「……はい。覚悟しています」

「私も、姉さまと一緒に大丈夫。どんなことでもする、します」

ん？なんか間違ったニュアンスで伝わった気がするな……まあいいけど。

俺と奴隷二人を含む荷物満載の荷車を、フー一人に牽かせて走るのと6時間。ホームに着く頃には、日が暮れて辺りが薄暗くなってしまう。

ホームに到着すると同時に、仁保姫が心配そうな顔で出迎えてくれた。

「おかえりなさい。一橋さん。門倉さん。遅かったですね。あれ、その方々は？」

「ああ。仁保姫。すまんがこの二人をお前らの部屋に連れて行って体拭いて新しい服を着させてやってくれ。あと髪の長い方は足を切

断してるから、ちょっと状態を見といてくれるか？」

「え？えっと、わかりました」

仁保姫が二人を連れて二階の女性部屋に向かう。入れ違いに残りの三人がホームから出てきた。

「クー？今の二人はなに？」

「ああ、タクヤ。今から話す。その前にさあき」

「なにになに？」

「お前は仁保姫と一緒にさっきの二人、世話してこい。一応、何か隠し持つてるかもしれないから、確実に裸にひん剥いて着替えさせろ。あとステータスも何もかも全部調べとけ」

「え。なんかエッチ」

「うるせえ。さっさといけ」

「はい」

とことこホームに戻るさあき。タクヤに状況を説明しようと思ったが、六道が黙って荷車の荷物を運び込み始めていたので、俺たちもそれに倣いとりあえず荷物をすべてホームに運び込んだ。6時間走り続けてボロ雑巾のようになってしまった変態坊主は放置して。

「なるほど。馬車じゃなくて奴隷を買ってきたってことね」

「そ。しかも性奴隷候補にな」

「バっ！それは……！！」

「違うのか？」

「えっ……えっと。……はい。そうです」

「最低ね」

「うっ……」

回復したフリーを囲んで、事情を説明する。タクヤの追求に加え、止めに六道のゴミを見るような目で蔑み。完全に『もうやめて、フリーのHPはゼロよ』状態だがまったく同情できない。いいぞもつとやれ。

一通り状況を飲み込むと、タクヤは大きく息を吐きながら言った。

「まあ買ってしまったものは仕方がないね。二人には家事や炊事をしてもらおう。ホームを管理してくれる人が居たほうが迷宮探索の効率がよくなるだろうし」

「だけど、サラは隻脚でエレンなんかまだガキだぞ。できる仕事なんかあるのか？」

「エレンは力仕事じゃなければ大丈夫だと思うわ。問題はサラだけど、まったく歩けないって訳でも無いんでしょう？簡単な炊事やお針子の仕事くらいできるはずよ」

「それはそうだが」

「六道の言つとおりだ。なんなら簡単な義足でも作ってやればいい。フリーが」

「俺っ!？」

「あたりまえだ。寝ずに作れ。あと彼女達の代金は借金扱いにしておくから、迷宮潜ってさっさと稼げよ」

「う………うっす」

そんなこんなで二人はメイドとして働いてもらうことになった。体を洗って清潔な服を着させられた二人を広間に呼び、二階の余っている小部屋を与えて、住み込みで雑事をしてもらう旨を説明する。基本的に食事も生活も俺たちと同じ様にしてもらうことにした。

予想していた待遇と違ったのか、ずいぶんと戸惑われた。なぜ奴隷

が主人と変わらない待遇なのかと。確かにこちらの世界では異常なのかもしれないが、俺たちが奴隷をどうやって扱うものなのか知らない以上どうしようもない。

その代わり、一生懸命働いてくれ。とタクヤが言うと、涙目になりながら二人が頭を下げた。さあきと仁保姫は可愛い妹が出来たといつてはしゃいでいるし、六道もまんざらじゃなさそうだ。

女成分が当社比60%増しになってさらに姦しくなってしまったわけだが。

「人手は欲しいと思ってたし、よかつたんじゃないかな？クーはメイド好きだろ？」

「まあな。メイド服でもあれば完璧なんだけどな」

「今度俺が買ってくるよ」

「だまれフー。俺が買ってくる。お前は馬車馬のごとく働いとけ」

「ひでえ……………」

「まあまあ二人とも。とりあえず一応確認しとくけど」

タクヤがニヤニヤしながら言った。

「エロい事は禁止ね」

……………たりめーだ。

13

サラとエレンがホームに来て1週間ほどが経過した。

二人は思ったよりもいい働きをしてくれている。俺たちが迷宮探索に潜っている間、歩けない姉のサラはお針子として裁縫や装備の補修などを担当し、姉の分まで働くと思気込んでいる妹のエレンは家事全般を担当する。タクヤの狙い通りその分俺たちは迷宮探索に集中できていた。

特にサラは思った以上に優秀だった。特に裁縫はかなり得意なようで、技術の高さをさあきが褒めちぎっている。いままでこの辺りの仕事は、さあきと六道の担当だったが、それは所詮、現代女子高生が家庭科で習う程度の技術だった。だがサラのそれは完全にプロの手際である。貴族のお嬢様ってこんなにすげーのかと思った。

が、そんなに裁縫が上手いのはサラだけだったようだ。というのも妹のエレンは全くの不器用であり、細かい作業はてんでダメ。何をやらせてもがさつで空回り。いつも失敗してはサラに説教され、しようがなく俺たちが仲介に入るといった感じ。まあやる気だけはあるので、慣れれば大丈夫だろう。

二人とも当初の不健康そうな様子は無くなり、だいぶ体つきが良くなってきている。サラの足も最初来たときよりはかなり調子が良いそうだ(切断してからまともな治療を受けてなかったらしく、当初はそーとーひどい状態になってしまっていた(って仁保姫先生が言ってた))

そしてなにより二人とも笑顔が増えてきた。だいぶ警戒心が解けて、ここの生活にも慣れてきたのだろう。

一応、二人に裏が無いかを警戒していたのだが、さあきに調べさせたステータスや持ち物にも特に怪しい所はなく、時折話す過去話にも矛盾はないようだったので、今はそんなに警戒していない。

「それに、リアルメイドはズルいよなあ」

つい独り言でつぶやいてしまう。先日、そろそろメイド服を買ってきこようという話になった時。思った以上に女子が食いついてきて熱くメイド服について激論を繰り広げた後、それを聞いていたサラがあつという間に一着仕立ててきてしまうという事があつた。

それをエレンに着させてみると、まさに反則級の可愛さで、皆で大騒ぎしてしまった。女子と男子ではざわつくポイントがずれていた様だが、そこは気のせいということにしておこう。

サラはすぐに自分用のメイド服も作成し、お揃いのメイド服を着た金髪姉妹と一緒に並んで、

『お帰りなさいませご主人様』

と出迎えてきた時には、もうなんていうか、最高でした。

閑話休題。とにかく二人のサポートもあって、迷宮探索のペースは加速し踏破も目前である。現在マップングは19階まで終わり、宝箱回収も17階まで完了した。20階はボス戦の可能性があるので残している。

現在時刻は真夜中すぎといったところだろう。日課である真夜中スキル特訓をしに、屋根上に来ている。いつもなら月明かりで結構遠くまで見通せるのだが、今日は雲が厚く出ているようで、いつもに増して闇が深い。文字通り一寸先は闇状態である。さきほどまで微かにさあき達のガールズトーク（笑）が聞こえていたのだが、静かになったところを見ると寝てしまったのだろう。

というわけで、スキル上げである。今、重点的に上げているのはスキル『魔石加工』。街で出会った魔道士エルフ・フレイヤの話はタクヤと検討し、二人で『魔石加工』のスキル習得することにした（代わりに『覗き見』スキルを消去している）

向かって右側に山積みになされた魔石を手に取り、『フォーマット』と念じると、淡い光と共に透明な結晶へと代わる。それを左手の箱に投げ入れる。それを何回も何回も繰り返していた。

この透明化した魔石に様々な魔術を詰めること（『エンチャント』）ができ、それを生活や戦闘で使う。フレイヤの話をもとめると、高レベルの魔術やレア魔術を売り物にするために必要な手順は、

- 1・質のいい魔石を手に入れる。
- 2・その魔石から不純物を抜き取る。
- 3・高レベルの魔術やレア魔術を詰め込む。

の三つである。

1・は今まさに魔石を手に入れるために迷宮探索をしているから問題ない。質についてもさあきの『解析』により、容量というパラメータが存在することがわかったので、大まかな等級付けが出来るよ

うになった。どの魔術にどの程度の容量が必要なかはこれから調べていく予定だ。

3. についてはタクヤの出番である。ユニークスキルの『時術』に加え、火水風土の基本魔術もすべて習得しているこいつにこの過程は任せてしまえばいい。

ということ、おれがいまシコシコやっているのは2. 『フォーマット』である。なぜコンピュータ用語？と突っ込みたくなるこの技は、『魔石加工』スキルの基本技の一つであり、魔石から不純物を抜き取り、『エンチャント』できるようにするもの。

それだけの技なのだが、どうも質の良い魔石だと一回一回に大量のHPを消費するため、数をこなすのは中々面倒である。このHPを消費する性質は3. の『エンチャント』をする場合にも適用されるため、じゃあ分業するかということ、俺が『フォーマット』を担当しているという話。

だが、思った以上に面倒な作業だ。一回で多い時はHPを半分以上持っていかれ、回復するのに3分以上ほどかかってしまう。また、いきなりHP全部持っていかれて死亡、というギャグみたいな事は無いだろうが可能性は排除できない。しょうがないので出来るだけ質の悪い魔石から処理するようにしている。スキルが上がるばもうちょっと楽になるだろう。きつと。

そんなことを考えながらHPの回復を待ち、再び魔石を手に取り、『フォーマット』を発動して箱に放り込む。

HP回復を待つ間はいつも通り『眼力』と『隠密』のスキル上げ。とりあえず上げている感が強い二つである。

『隠密』は現在のスキルレベル20で使えるのは『ヒドウン』『サイレント』『マナカット』の三つのアクティブスキル。どれも敵に気付かれなくするタイプの技だが、現状のPTプレイではあまり役に立っていないが現状である。だが、俺のユニークスキル『死』と相性が良いことは間違いない。上げておいて損はない。はずである。

『眼力』のスキルは二つ、『夜目』と『千里眼』。この二つは面白くて、使っている感覚としては目を凝らすと暗視ゴーグル+望遠鏡の効果を使える感じ。面白いのだが、役に立ったことはあまり無い。原因は周囲1kmをカバーする広域レーダー持ちが居るから、ほとんどの場面ではそちらの方が有用なことが多いからだ。まったく、『解析』スキルは便利なのは良いが、便利すぎて困るよな。

「ん？」

その時、遠く、かなり遠くに揺らめく明かりが見えた。『眼力』スキルの感度を最大まで上げてその方向を見ると、それは20人ほどの集団のようである。そしてさらに、こちらに向かって来ているように見える。あの姿はゴブリンなどではない。おそらく、人だ。

距離にしてまだ5km以上ありそうだったが、とにかくこんな時間にあんな集団は見たことが無い。

「方向は鉦山地帯の方が……」

高速で頭を働かせる。所々むき出しの山肌が見える山脈地帯の方角から、連中はまっすぐホームに向かって進んでいる。ホームを取り囲むように広がる木立地帯に入ると、明かりはさらに小さくなった。目で追っていないければ気が付かないほどに。おそらく明かりを少な

くしたようだ。

とにかくあの連中はまともな集団ではなさそう。そういえばたしかあの辺りの山脈一帯をねぐらとした盗賊団があったな。先日、スクルドの街の戦士ギルドで賞金首になっていたことを覚えている。首領の名前までは覚えていないが、賞金額はたしか生け捕りで金貨10枚だったはず。

要するに、盗賊団が俺たちを襲撃しようとしている可能性が高い、か。物騒な話だ。とにかくさっさとみんなを叩き起こさないとまずいな。

俺ははじかれた様に立ち上がると、二階へ降りるはしごに飛びついた。

13 襲撃（後書き）

『眼力』 『夜目』

暗視効果。

『眼力』 『千里眼』

望遠効果。

『隠密』 『ヒドウン』

風景と同化して不可視になる。ただし移動はできない。

『隠密』 『サイレント』

移動で生じる音を消す。

『隠密』 『マナカット』

自身の魔力を断ち切る。効果中、魔術使用不可。

『魔石加工』 『フォーマット』

魔石を浄化する。

『魔石加工』 『エンチャント』

魔石付魔を可能にする。

14 撃退

14

「おい。三人とも。起きろ」

「……………んあ？クー？」

「……………？」

いつもは立ち入り禁止にされている女子部屋に無断侵入。寝ているさあき達に声をかけたわけだが、よく考えると悲鳴をあげられてもおかしくない状況だな。危ない危ない。

「なにがあつたの？」

「端的に言つと、ここが盗賊団に襲撃されそうだ」

その言葉ですぐに動いたのは六道。ベッドから飛び起きると、まだ俺がいるのに着替えを始めやがった。その様子に事態を察した様子の二人が眠い目を擦りながら起き上がる。

「さあきは今すぐ俺について来い。六道と仁保姫は戦闘準備を整えて広間にきてくれ。明かりは極力点けないように。いくぞさあき」

「え？え？ええー？」

着の身着のまま状態のさあきを引っ張って屋根上に戻る。タクヤがすでにそこで待機していた。男子陣は先に起こしておいたのだ。サラ達はフーが起こしに行っているはずである。

「雲が厚くてぜんぜん見えないや。どっちにいるの？」

「こつちだ。ちょっとまって……もう2、3kmのところまでは来るな」

「さあき。なにか情報わかる？ここから見て西の方角、あの辺りらしいけど」

「んー……ダメ。まだ遠いみたい」

「そつか。クー、あいつらの大体の数は？」

「木立地帯に入る前に見たときは、20人近く固まっていたな」

「わかった。とりあえず状況は把握した。広間に集まろう。さあきは急いで着替えてきて。敵情報について何かわかったらすぐに教えて」

「う、うん」

さあきが慌てて女子部屋にとんぼ返りである。あわよくばこの距離でもなにか敵情報がわかるかと思っただが空振りに終わった。

「盗賊団ってことは対人戦だな。どうする気だ？」

「いつかは戦ることになるとは思っていたけど。このタイミングはちょっと予想外」

そう言っただクヤが暗い表情で腕を組む。何を考えているかは大体わかる。敵はモンスターではない。人間である。と、すると今回俺たちは初めて人を殺すかもしれない、ということだ。

もちろんゴブリンやワーウルフなどの人型のモンスターを倒しているので、少なくとも俺にはそこまで違いがあるとは思えない。人を殺したら魔石になるのか、とかのほうに気になる。だが、割り切れない奴には越えられない一線だろう。

「一応聞くけど、クーはいけるよね？」

「おれは問題ない。ただ他の奴らはどうだろうな」

「んー。あやねはいけるんじゃない？」

「六道ね。あいつはまあ大丈夫そうだけど、実際どうだろうな」

「まあ今回は時間も無いし、期待するしかないね」

そういつて俺たちは皆の待つ広間に向かった。

道なき道を、盗賊たちが進む。粗末な装備で武装した汚らしい男どもがほとんどのようだ。簡単な作戦会議の後、俺と六道の2人はすぐに盗賊たちの進路上に向かい、闇の深い木々の上に潜んだ。俺は『ヒドウン』、六道は『闇術』『ダークネス』により完全に風景と同化している。

「よし。全員行ったかな」

「まずはあなたの仕事でしょ？」

「ああ。じゃ、事が始まつたらよろしくな」

やっと『隠密』スキルの活躍所か。『サイレンス』を発動させて樹から飛び降りる。そして集団から離れ気味だった盗賊一人に無音で近づき、口を塞ぎつつ喉を切り裂いた。

『一撃死』狙いのため傷が浅かったらしく、あまり血も吹き出さず、また声を発することも無く男は事切れた。その男を静かに横たわらせると、次の標的を探す。

出発する直前にさあきの『解析』スキルにより判明した敵人数は18人。レベルは最大で26。これは俺たちの中で最高レベル六道の

レベル27に匹敵する強さだが、そこまで高レベルな奴は一人だけであり、後は一桁も多かった。おそらくそいつが首領だ。

できればそいつを暗殺できればいいのだが、そこまで話は簡単ではないだろう。まずは数減らした。集団を背後から追跡して隙をうかがい、二人目の逸れ者を暗殺したところで、連中はついに木立を抜け、ホームを見渡せる地点に到達した。

殺気立ちながら戦闘準備を整える盗賊たち。そして中心には首領と思われる大柄な男がいた。その男が指示を出すと、周囲の仲間が火球『ファイアボール』を作り出し、ホームに向かって打ち出してきた。

数は3つ。轟々と火の粉を撒き散らしながらホームに迫る。が、その内一つが突如、鋭角に方向を変えて明後日の方向に飛んでいく。残りの二つも途中で停止して、周囲を煌々と照らす松明に変わってしまった。フーの能力『グラブ』の仕業だろう。相変わらず便利な能力である。

その明かりの元に、タクヤと仁保姫が姿を現す。

3人目

とりあえずホームを火攻めにしてから襲撃という流れだったのだろう。盗賊団は予定と違う状況に驚きとまどっているようだ。しかし、相手がまだ年端も行かぬ少年少女なのを見ると、すぐに気を取り直したようだ。

4人目

「よく気がついていたな。ガキはまだ寝てる時間だと思っていたぜ！」

首領の煽りに、タクヤが大げさな身振りを交えながら応える。

「はっ！おっさんらこそこんな時間にみんなで連れションか？いい年して一人でトイレにもいけねーのか！？」

5人目

その返しに盗賊団からは大笑いがおきた。やれ威勢のいいガキだとか、やれ隣の仁保姫が上玉だとか大騒ぎだ。やっぱ見た目でなめられてんなー。

6人目

7人目

「はははは！おもしれーガキだな。泣き顔が楽しみだ。うっしやー野郎共！やつちまえ！」

首領のその号令に部下が応じて咆哮する。そして、首領とファイアボールを使った後衛3人を残して、盗賊団が突撃を開始した。

そこで首領は異常に気がついたようだ。味方の数が少ないことに。

18人いるはずの盗賊団から後衛3人と自身を抜けば、突撃するのは14人のはず。だが実際にはその半分しかいなかった。そりゃそうだ。おれが殺して回ったからな。タクヤ達のミスディレクションが素晴らしかったので、俺は背後から近づいて首に短剣をつきたてるだけの簡単なお仕事でした。

異変に気がつき、指示を出そうとする首領を、すでに背後から六道の『闇術』『シャドー』が捕らえていた。行動束縛。これでしばらく、少なくとも1分は首領は身動きが取れない。

だが、そんなに余裕があるわけではない。『シャドー』束縛している間、六道のHPは消費し続けるので、速攻で魔術師系の後衛三人を殺しにかならなければならない。俺はその中の一人に狙いを定め、『ダツシユ』で一気に距離を詰めた。

こちらに気がついた相手の詠唱を『スローイングナイフ』で妨害し、距離をつめてからはナイフで応戦してきたそいつを軽くないしながら、30秒ほどでHPを削りきる。すぐに六道の援護に向かおうとしたが、すでに残り二人は、六道のバスタードソードによって、上半身と下半身が分離させられていた。殺し方がこえーよ六道。

最後に『シャドー』で束縛中の首領の足に短剣を突き立てて行動力を削いでおしまい。やれやれ。

「思ったよりHP減らされたな」

「そうね。『シャドー』は敵レベルが高いとHP消費が増えるみたいだから、それが原因かな」

「なるほどねえ」

六道のHPが半分ほどになっていた。30秒程度でこれだから、もうちょっと長引いたらまずかったかもな。

「ああそうだ。おっさん」

両足の短剣を突きたてられて悶えている首領に声をかける。自分で

やっておいてなんだが、ちょー痛そうだなこれ。

「聞きたいことが幾つかある。答える」

「ガキが、なめるな……ぐああ！」

その言葉を言い終える前に六道が前蹴りをかまして首領を押し倒すと、次の瞬間には巨大なバスタードソードをギロチンのように首に当てていた。自身はマウントポジションである。

「動いたら殺すわ。聞かれたことにだけ答えなさい。この豚」

ノリノリですな六道さん。とっってもお似合いです。じゃなくて。情報収集だ。

「なぜ俺たちを狙った」

「ひっ！お前達が、最近稼いでるって聞いたから……」

「だから」

「お前らが、稼いでるってのは、スクルドじゃかなり有名だぞ」

「質問を変えよう。だから俺たちのホームの位置を聞いた」

「街の情報屋だ！」

「名前は」

「……デイン」

デイン。知らないな。今度街に行つたとき調べておくか。

「なるほどねえ。じゃあ次の質問だ。他に仲間はあるか」

「拠点にあと3人……部下と奴隷のガキがいる」

「3人ね。それは本当？」

「ほ、本当だ！！だからその剣を降ろさないでくれ！」

六道はさつきからポンポンとバスタードソードの柄を玩んでいる。手を放せば、首領に添えられた巨大な刃はいとも簡単に首を飛ばすだろう。なかなかスリリングな状況である。

しかし仲間が残ってるのか。3人というのが嘘で、実際もつというとしたら面倒だ。さつさと潰しといたほうがいいか。

「よし。六道、もういいや。あっちも終わったようだし」
「そう」

見るとホーム居残り組が手を振っていた。あちらも終わったようだ。後衛とリーダーを失い、しかも人数が半分に減らされていた残りの連中は、タクヤ達にボコボコにされて生け捕りにされていた。さすがに7人程度なら楽勝である。敵レベルも低いしな。

タクヤの作戦は大まかには、俺ができるだけ敵を間引き、戦闘になったら背後から俺と六道が挟撃して、一気に勝負を決めようという物。結局、間引きの段階で敵戦力を半減させてしまったため、戦闘開始から5分もしないうちに俺たちが勝利してしまったのだが。まあ全員無事でよかった。

とりあえず、生け捕りにした奴らの武装解除をし、縄に連ねてフーと仁保姫を見張りつける。残りの四人で生け捕りにした一人を道案内にして、拠点を潰しに行くことにした。

14 撃退（後書き）

『闇術』 『ダークネス』

HP 継続消費小。自身を闇に溶け込ませる。

15 昼下がり

15

一応、敵人数が分かるさあきを連れてきたのだが、盗賊団の拠点には首領の情報どおり、残党が2人と奴隷が1人だけだった。すぐに殲滅しに乗り込んだのだが、その時の話は、なんとというかあまり詳細に描写しても不快なだけなので要点だけ語る。

奴隷がまだ若い娘であり、乗り込んだ時もそれはひどい状況だった。その現場を目撃したさあきが逆上して残党2人をミンチにしてしまったぐらいだ。まあミンチは言い過ぎだが、とりあえずHPが無くなるまでポコポコにしてしまった。泣きながら殴り続けるさあきをなんとかなだめて、残党を生け捕りにして制圧した。さあきがキレて無かったらおそらく俺か六道が皆殺しにしていただろうけど。

まあそれはそれ。とにかく残党狩りはすぐに終わった。その際、興味深いことが分かったのだが、これは後で話そう。忘れずに金目のものを戴いた後、奴隷の娘は保護してホームに連れて帰った。

盗賊団の拠点を潰し、スクルドの街まで走って向かい、戦士ギルドの護送団を呼んでホームに帰ったときにはすでに日が高くなっていた。戦士ギルド員のおっさん（さあきによるとLv31）は、俺たちみたいな子供が盗賊団一つを潰したことにかなり驚いていたが、それ以上は追求されずに賞金を渡し、盗賊を連行して帰って行った。

死体はそつちで処分しろと言われたので、タクヤが『土術』『フォルト』で穴を開けて、さらに『火術』『ファイアランス』で火葬にしてみました。その際死体をタクヤと運んだのだが、さすがにちよつと気分が悪かった。まさか人を殺してその死体を自ら運ぶ経験をする事になるとは、人生わからないものである。

「やれやれ。やっと一息つける」

タクヤが疲れた様子で広間のイスに腰掛ける。他の四人は、盗賊たちの後始末を俺たちに任せて今日も迷宮探索に出かけていった。残りの18・19階の探索を済ませてくる予定だ。

「しかし、今回の戦闘は色々わかってよかったよね」

「ああ」

そう。今回の戦闘では初めての対人戦という、言ってしまうえば人体実験を行ったことで、大事なことがいくつか判明した。その中でも重要な事は、人は死んでも魔石にならない事と、HPが0になってもすぐには死なないことである。

前者は人とモンスターは厳格に違う存在であることを示唆している。例えばそこらへんにいる虫を殺しても魔石にならないことはすでにわかっているの、モンスターを『死ぬと魔石になる生物』と定義すれば、人はモンスターでは無いということ。当たり前かも知れないが、こうゆう小さな設定がこの世界を知ること、ひいては現実世界に帰還することに役に立つはずである。少なくとも俺はそう考えている。

そして大事なのは後者である。意外というか、やはりというか、H

PO＝死では無いことが判明した。

それがわかったのは残党狩りの時。さあきがボコボコにした盗賊の1人が、HP0にもかかわらず生存しており（意識は失っていたが）、さらにしばらくするとHPゲージが回復したのである。

これは有名どころで言うと、HP0＝死亡のドラクエ型ではなく、HP0＝戦闘不能のFF型のシステムであると言える。つまりHPは直接生死には関係が無いということだ。勿論、HP0の状態が危険な状態である事に代わりはないが、戦闘中にHP0になっても仲間に助けてもらえば生き残れる可能性がある事がわかったのは大きい。

「死亡とHP0は別物ってことという事はわかったけど、じゃあHPってどういう意味なのかな」

「どっちかっていうと『スタミナ』とか『気力』的な意味なのかもな。魔術や技を使う時に消費するから。たしかウルドの街で魔術士ギルドのおっさんが魔術を使い続けたらぶっ倒れるとかいってたし」「そういえばサラとエレンにも協力してもらって、いろいろ検証した一つに、HPバーが見えるの俺たちだけってのがあったよね。その辺りも関係してるかも」

「なるほどねえ」

「ご主人様。お茶を入れ、入りました」

「ああ。ありがとうサラ」

「ありがとう」

すっかりメイド服姿が姿が様になってきたエレンが紅茶（正確には野草の煮出しらしいので煎茶と呼ぶべきか）を淹れてくれた。それを口に含みながらタクヤがエレンに尋ねる。

「ノエルの様子はどうか？」

「まだ起きないみたい、です。姉様が看てくださいなさっているので大丈夫だと思う、ますけど」

「そっか。かなりひどい扱いを受けてたみたいだから、最初は怯えてるかもしれないけど、仲良くしてあげてね」

「はい！任せて！ください！」

エレンはいつもの調子で答えると、ピヨコピヨコと元気良く走りながら仕事に戻っていった。いい娘なんだが、色々と心配なやつだ。

ノエルというのは盗賊の拠点で保護し奴隷の娘。奴らに精神崩壊寸前まで追い詰められていた様子だったので、しばらくここでサラとエレンに世話をさせることにした。歳も近いだろうし、ちょうど良いだろう。

「なんかまた人が増えちゃったね」

「良いんじゃないの。問題はいつまでもここに居るわけにもいかなってことだけだ」

「まあねー。ああ、そういえばさっき王子から手紙が来たよ」

「王子？」

王子とは俺たちのクラスメイト。スーパーの後に10個くらい横文字が来る生徒会長。そういうえば、あいつと別れてもう一ヶ月近くたつのか。

「クーが戦士ギルドの人たちを連れてきてる間に回収屋が持つてきてくれたんだ」

「ふーん。で、なんて書いてあったんだ？」

「あっちもいろいろ大変だつてさ。何人かが俺たちみたいに王子達

のグループから別れて行ったらしいよ」

「まあそれはしょうがないな。ドキユンネ3兄弟とか十姉御よしたてとかは人の話を聞くわけがないし」

「そうそう。その4人と、あと久遠、唐松、友森、三好あたりもいなくなっただって」

「男ばつかじゃねーか」

今、名前が出た8人中7人が男だ。ってことは逆算すると……えーと、王子の所に残っているのは男6人と女16人か。ひどい男女比だなおい。

「しょうがないよ。王子モテるから」

「あー……しょうがないかもな」

「で、ウルドの領主との契約は完遂したから、これから王都に行くってさ」

「王都に行つて領主を救つたつてで王様と謁見ところかな。なんかその後の展開が見えるな」

「王子は主人公体質だからねー。勝手にどんどん勇者になって行きそうだよ」

「というか、なるだろうな。まあ俺たちは俺たちのやり方で現実世界へ帰る道を探せばいい」

王子が現実世界に帰る方法を見つければそれでいいし、こっちが見つけられなくてもいい。王子が王道勇者路線で行くなら、こっちは別の攻略路線でいけばいいだけだ。

というわけで、タクヤと俺は現在、効率的な金策を考えている。レベルはだいたい上がり、この世界の戦闘にも慣れてきたので、次に必要なのは金だそうさ。タクヤの言い分は次のような物である。

「よくゲームでは依頼とかの仕事をこなしながら金稼ぎするじゃん。あれって俺たちみたいな異世界人にはすごい効率悪いよね。せっかく現代知識やチート能力があるんだつたらそれ使って手っ取り早く金と権力を得て、それから行動したほうが楽だし早いし、なにより安全だよ」

まあ、言いたい事はわかる。ゲームを攻略するためにはレベルを上げて、装備を完璧にして、徹底して情報を集めて、綿密に計画を立てて、それから行動すればいいと言うことだ。

だがその考え方自体はあまり俺の趣味ではない。それってレベルMax・装備最強で挑むラスボスみたいなものだろ？俺は言いたい。そんなの何が楽しいのかと。ギリギリのレベルと手持ちの金で揃えた装備、そして持っている能力だけで倒すから燃えるんじゃないか。だが、実際に自分の命が掛かかっているいまの状況では、タクヤの言い分が正しいだろう。俺だって死にたくは無い。出来る限りの備えはすべきだろう。

「まあ、現状、金策はやっぱ『魔石加工』が最有力だろうな」「うん。そういえば、やっと『時術』『ポーズ』がエンチャントできたよ。現状あまり手に入らないレベルの容量の魔石が必要だし、一個作るたびにHPが残り数ドットになっちゃうけど。何個か作つたから今度使ってみてよ」

そういって、タクヤはポケットから銀色の魔石を取り出すと、無造作に投げてよこした。

「じゃあ『リウィンド』とか『フォワード』のエンチャントはまだ無理か。この迷宮で採れる魔石じゃ容量が足りないのはちょっと困

つたな」

「うん。だからもうちょっと金を稼いだら、もっと強いモンスターがでる地域か迷宮を探そうと思う。どうせこの迷宮はあと3日もあれば踏破できそうだしね」

「それだけど、どうするんだ？ 最奥にいるボスを倒して魔方陣を破壊したら迷宮は消滅するって話だろ。さっさと終わらせるのか？」

「もう移動用の馬車も買ったし、当面の資金も確保できてるからねえ。俺としては次の段階に進もうと思ってるよ。当面、金を稼げなくなつてフリーあたりが怒りそうだけど」

「まあな」

ただあいつは今はまだ俺たちと一緒に行動しているけど、遅かれ早かれ俺たちと別れてハーレム作りを開始するはずだ。金を稼ぐノウハウもある程度わかってきただろうし、そろそろ一人で動き出すかもな。

「ま。それにさ」

子供みたいな顔でタクヤは続けた。

「初めてのボス戦だよ。わくわくしてこない？」

「……はっ。ははは！ そりゃそうだ！」

15 昼下がり（後書き）

『土術』 『フォルト』

HP消費中。地面を動かして割れ目を作る。大きさは『土術』スキ
ル・INT依存。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3593y/>

放課後RPG

2012年1月6日21時25分発行